

C. アレギザンダーとの対話

建築家3人の質問状と回答

難波和彦氏の質問

1. あなたは現在、パタン・ランゲージの研究をさらに押し進めて空間の幾何学的性質についての研究に進んでおられますが、その研究は今回の東野高校の計画にどのように反映されたのでしょうか。その具体的内容を、お聞きしたいと思います。
2. 今回、完全なかたちではないが直営方式を試みられた結果、今後日本においてこの方式がどんな可能性をもつと考えられましたか。
3. 今回の作品は、日本の古い建物、例えば川越の蔵造りや禅宗の寺院を連想させるデザインで、それはある意味でポストモダニズムの建築と共通するものを感じさせますが、その点、設計者としてはどうお考えですか。

井出建氏の質問

1. 15年前、20代前半の私は、古い『アーキテクツ・イヤーブック』の中からあなたの論文〈革命は20年前に終わった〉を見つけ出し、それを訳したことがあります。近代建築の誕生を結果とする歴史は、広く人びとに受け入れられるほどに十分な時間を経過した。もはや建築の枠組みを革命できるかのごとくに血眼になることはお門違いだ、と書いてあるのを読んで、目を見張った覚えがあります。あなたは、建築の革命とは具体的にどんなことを思い浮かべていたのですか、あるいは現在思い浮かべますか。

2. 東野高校の第2の門を過ぎて、池に向かってゆったりと下ってゆく。砂利道はそこから左に折れ、両側を建物に挟まれて登り坂に変わる。右手にどっしりと大講堂が建っている。池の先には再びゆったりと登る芝地がなだらかに続き、丘の上には食堂棟を遙かに見はるかすことができる。ここまで歩いてきて、私はひとつの風景が構想されたのだと思いました。箱庭のように、あるいはイギリス式庭園のように、自然を模倣したユートピックな空間が構想されたのだろうと。

もと茶畑であったこの現実の大地は、東京からのスプロールの最先端に位置しています。いわば決戦前のいかにものんびりした戦場でもあるわけです。周辺には都心から転出してきた大学も見られます。これまで郊外に移転した大学の多くのキャンパスは、管理的な機構を増強してきました。単純化して言えば、この大地は空間の商品化と管理化を進行させてゆく舞台でもあるのです。

建築物は確かに、ひとつの敷地に限定され、直接介在する人びとも、その立場も、限られています。しかし、現実の空間が陥っている状況と全く関係をもたずに設計し、建設することもまた不可能なはずで、そして、この学校の建物が、そうした状況に対するあなたの回答ということなのでしょうが、この二つの場、学校の内と外と言ってもよいのですが、相互に問題を交差させぬままに、このまま二つの方向に進み、互いに限りなく

遠ざかってしまうのでしょうか。

Team Zoo 樋口裕康氏の質問

私が東野高校を見た感想を、以下に記します。a~cまで、各項について当たっている項には○、間違っている項には×を付けてください。×の場合には、その理由を付けていただければ幸いです。

a. 素晴らしかったこと

- a-1 街をつくろうという発想。
- a-2 大胆不敵な構造（講堂・体育館）。
- a-3 非常に判りやすい組立て（少し息苦しいが）。
- a-4 門からの導入部、講堂前の広場、南北を軸とする教室間のストリークの寸法と拡がり。

b. 残念だったこと

- b-1 街の組立てにおいて、日本の街や村の要素が欠除して、ギリシャ時代の都市の組立てであること。
- b-2 したがって、あまりにもストイックで、表情が硬すぎる。もっとルーズでラフなほうが良かった。
特に、教室群の壁の扱いは、土壁などはどうだったのだろうか。また、コロネードの柱は木のほうが良かった。
- b-3 日本の形の中で参考にしているのが（たぶん僕の一方的な想像ですが）、●京都-奈良、●倉敷、●川越、などのリファインされた所だけだったこと。生きている日本の都市や村

このインタビューは、東野高校を見学した3人の建築家—樋口裕康、井手建、難波和彦—が、各自で質問を作成し、これをアレギザンダーに手渡して、その場で答えてもらうという形式で行なわれた。

このような形式を取ったのは、アレギザンダーの滞在期間が短く、前もってアポイントメントが取りにくかったため、最悪の場合は文書による回答もありうると考えたからである。幸い、短時間ではあったが、直接インタビューすることができた。立会ったのは、編集部と質問者の一人、難波である。

アレギザンダーには、質問者はもちろんのこと、

質問の内容についての前知識はほとんどなく、彼自身の言を借りて言うと、「自分のこれまでの研究や設計に対して、きわめて“friendly”な建築家による質問である」ということだけが伝えられていた。

（もっとも、難波だけは、東野高校の仕事に間接的ではあるが協力しているので、面識程度はあったのであるが。）

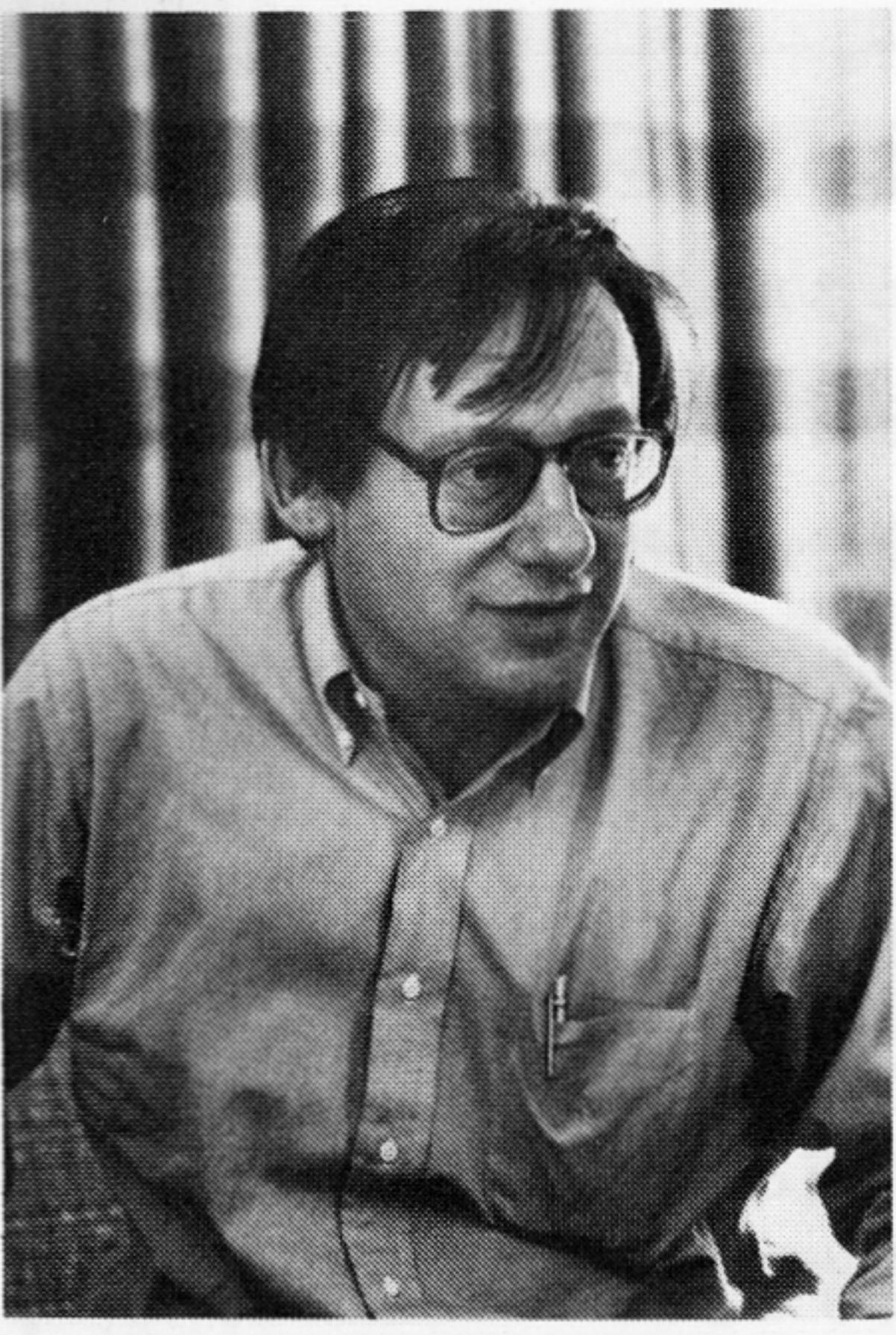
竣工式の翌日、4月12日（土）、場所はホテルの彼の部屋である。短期間の滞在中に片付けねばならない、さまざまな雑務に追われていたと見え、約束の時刻より約2時間遅れてインタビューはスタートした。

手渡した質問リストに眼を通すうち、アレギザンダーの表情は、徐々に困惑の色を深めていった。しばらく考え込んだ後、

「ここに示されている質問は、一部を除けば、私にとって全く不可解（strange）で、しかも心外（disturbing）なものばかりなので、まともに答える気にはなれません。」

と、彼は静かな口調で喋り始めた。

このような調子であったから、一時はインタビューの成立さえも危ぶまれたのだが、ともかく、急きょ話題を「彼の眼に、われわれの質問がどのように



C.アレキサンダー

を参考にすべきだった。全体がとりすましたジェントルマンといった感じで、普段着の部分かほしかった。

b-4 もっともっとアッケラカンとした楽しさがあったのもよかった(とは言うものの講堂の柱群、太鼓櫓—高すぎるが—などは無条件に楽しい)。パタン・ランゲージを読んでいると、納得しながらも声をたてて笑ってしまう(例えば玄関の項)。あのユーモア。

c. ナイス氏と話をして……

c-1 象：中間スケールが欠除している。花壇もベランダも樹木もベンチもない。玄関に棚もない。

ナイス：そうなんだ、これからつくってゆくつもりだ。広場なんか、からっぽだ。現状はファーストステージなんだ。

c-2 象：庇が短すぎる。長くしたほうが、ゆったりした形になる。

ナイス：庇の出は、もっと大きくしたい。特に体育館の庇は、ぜひ長くしたい。

c-3 象：笠原小学校(象の作品)を見たか。

ナイス：見た見た。小学校は良かった。でもコミュニティセンターはあまり……。

象：ゲラ・ゲラ・ゲラ(笑い声)

d. でもやはり……。

久々に、退屈しないで、1時間余りを過ごせた建築に出会いました。1年後、2年後が楽しみです。

アレキサンダー 国際的なコミュニケーションについての話をしていたところですね*1。難波さんの最初の二つの質問は良いとして、それ以外の残りの質問について言うのですが、何らかの形でそういう質問が出される時、例えば国際性とかいう話が出てきた時の精神的背景に共通のものが感じられるのです。つまり、ロンドンとかニューヨークから始まったのかよく知りませんが、ポストモダニズムとかモダニズムといった一つの枠組みが前提となって、このような質問が出てくるように思えます。それは私の感想では、一つのステージのセットみたいに、ある程度すでに出来上がっている背景がそこにあるというような感じを受けるのですが。つまり実際には、それがリアリティと本当につながったものなのかどうかは、非常に疑わしいことだと思っているわけです。

私がこの質問を見て非常に心外だと思ったのは、どうしてなのか申し上げます。この話し合いのために私は心の中で期待しておりました。というのも、質問に来るのは私たちのこのプロジェクトを良く理解してくれる人たちで、それについて大変に努力してくれているし、そういう意味で友好的な意味合いで話をするというメッセージを受けていたからです。それで一番ショックを受けたのは、私たちのプロジェクトを理解して、また友好的であろうとする人たちでありながら、その人たちのもっている根本的なものの考え方が、まだまだ一つのイメージというか、幻想的な像の世界にとどまっていた、本当のリアリティの中から彼らの基礎から、その気持ちが出ていないのじゃないかという疑いをもたざるをえないような感じを受けたからなのです。それが一番、私の心のバランスを崩した原因になると思います。

これらの質問の中に潜んでいる感情的な部分、あるいはその前提になっている精神的背景というのは、私が一生をかけて、それをなくさなくてはいけないと闘ってきたものに近いことなのです。

そうした感情は、例えばこういうふうには言えると思います。私がオムレツをつくるとしますね、その時にまずフライパンを熱くし、油を塗り、卵を入れ、刻んだマッシュルームを入れ、コショウと塩を

用意し、一番良い時機を狙って適量を振りかけ、ちょうど良い時機にフライパンからはずしてお皿の上に置く。すると、報道関係の人がそこにやって来て、「どうしてあなたのオムレツは半月のような形をしているんですか」と聞く(笑)。いただいた質問からは、そういう感じを受けるわけです。そう言われたら、その瞬間、何と答えていいか判らなくなってしまうわけですね。私としては、「オムレツは、月とはいっさい関係ございません」と言わざるをえない(笑)。

難波 でも、世の中には「それは半月ですね」というふうを受け取る人がいることも、確かですね。

アレキサンダー もちろん、そうかもしれません。

難波 それと同じように、東野高校の先生方や生徒たちも、もしかしたらそういうふうを受け取るかもしれないですね。

アレキサンダー それは想像ですか。それとも、実際に経験上正しいと思って言っておられるのですか？

難波 かなりそういうことが起こる可能性が高いと思うのです。

アレキサンダー もちろん、それはありえるかも知れないということは、認めます。しかし、それは学生にはあまり起こりにくいんじゃないかと思えます。彼らは無邪気ですから。きっと建築家には、そういうことが起こりやすいと思えます。どちらにしても、誰かがそういう気持ちをもつことはありうると思えます。

それがどうしてそこで起こるかということをもう一回分析してみますと、われわれが現在建物をつくっている状況というのが、非常におかしな状況になっていますから、あまりに当たり前な建物を見た時に、それがちょっとショックを与えるわけですね。それで、直ちに、どこかで見たことのあるようなありふれた建物を思い起こして理解しようとする。それはきっと、ほかの何百年もの間に建てられてきたありふれた建物と何か関係があるのじゃないだろうかという疑いわけです。でも、それは実は何の関係もないのです。誰も彼もが、それがまるでつながりがあるかのような気がしたり、何かに似ているんじゃないかと考えているだけの話なんです。

映ったのか」という問題に移すことによって、当初の意図とは角度の異なるインタビューが行なわれたわけである。したがって、インタビューの内容には、質問に対するストレートな回答はほとんど含まれておらず、もっぱら、そのような質問が出てきた思考の枠組みや精神的背景といった問題に焦点が当てられることになった。

結果的に見ると、全くのスレ違いインタビューに終わったことになるが、そのようなスレ違いがどこから生じたのかを考えてみることも、無意味ではな

らう。

われわれには、いちいち前提を確認しなければ話し合いが成立しないような状況をできるだけ避けたい、という気持ちがある。ジャーナリズムは、そうした暗黙の前提の上に成立しているような側面があるし、だからこそ、相手が持ち込んだ枠組みに何とか自分の枠組みを馴染ませよう、と努力するわけである。このような前提は日本人である限り、大抵の人が共有している。

今回のインタビューは、そのような暗黙の前提を白日の下に晒した、と考えるべきであろう。そう考

えたほうが、アレキサンダーにとってはともかく、われわれにとっては学ぶところが大きい。

もう少し突っ込んで言うと、アレキサンダーと質問者との間に、状況認識の点でかなり根本的な相違があったのである。アレキサンダーは、現代のいわゆる「価値観の多様性」なる状況を基本的に認めていない。それは「事実」ではなく、そのように見えてしまう人間の内的分裂の反映にすぎない、という捉え方である。「価値観の多様性」は支配的ではあるけれども、やはり一つの「価値観」にすぎないのだ。だとすれば、「やはり価値観は多様なのではな

難波 でも、もしかしたら、そのような結び付け方は人間がものごとを理解する時の非常に大きな出発点というか、何かよく判らないものに出会った時に、まずそれに自分を適応させていく時の重要なきっかけになるのじゃないかと思いますが。

アレギザンダー イメージの問題ですか。

難波 はい、イメージから入っていくことが一つの手掛かりになるのではないかと、ということです。

アレギザンダー いや、そんなことは……。

難波 そういう理解の仕方は、もしかしたらあなたの言われるように間違っているのかもしれませんが、現実にはそういう理解のされ方が非常に一般的に行なわれている場合に、どうしてそうなるのかということをもっとはっきりと、その理由なり背景にある根拠を明らかにしない限り、それを考えることはできないと思います。僕の3番目の質問には、そういうような意味が込められているのです。

アレギザンダー この質問を書いた人たちは、われわれの環境構造センターで出した本とか、私の書いた文を読まれたことはあるわけですね。

編集 かなり読んだことがある人たちだと思います。

難波 しかし『タイムレス・ウェイ・オブ・ビルディング』*2 以後は、多分読んでいないと思います。

アレギザンダー 『タイムレス』でもいいのですが、私が書いていることの中には、そういった一つのイメージから建物がつくられるとかいうことは、いっさい含まれていませんよ。

難波 確かに触れられていませんが、建築が実際にそういう受け止められ方をされているという実情がある以上、その間がどうやってつながるのかを問題にすべきだと思います。ただ単にこっちがだめで、「イメージは必要ない」というふうな言い方だと、なかなか理解してもらえないのではないのでしょうか。

編集 ここで質問された方たちは、自分はある程度判っていても、一般的に出てくだろう疑問を勘案して、その辺りの理解の橋渡しをしようという意図があったのだらうと思います。ポストモダニズム的表現についても、東野高校の場合、そういうふうにも取られる恐れがある。だから、もし違うなら違う

点を明確に説明してもらえれば、よりあなたやあなたの建築に対する一般の理解が深まるだろうと考えてのことだと思います。

アレギザンダー それが先ほど言った、カメラを部屋の中に持ち込んで、奥に入ってくる、ということに近いのです*3。ポストモダニズムの世界にいる人々には、そういう精神的な構造、つまりカメラをむき出しにして個人的な領域に侵入することも許されるというような感覚があるのかもしれませんが。そのような世界というのは、人間の感情の上に基本を置くのじゃなくて、一つのイメージの上に構造を構築しているものだからね。なぜなら、まずカメラはなによりもイメージをつかまえる道具ですし、さらにそこには、カメラをもって部屋の中に入ってくるというイメージもあるからです。

私が大切にしたいと思っている世界は、そうではなくて、最も原動力となる力、つまり、もっと人間の感情のほうに近いわけです。私は、人の部屋にズカズカと土足で入るようなことはできないのです。私の建物についても、そうです。私が建物の中で一番関心を払おうと考えたのは、あくまでフィーリングの問題で、決してイメージをその中につくり上げようという気持ちではなかったわけです。

難波 非常に個人的なことで恐縮なんですけど、僕は中塾君*4と4年前から付き合い、東野高校のプロジェクトにける彼のすごくエネルギッシュな行動が、どこからくるんだらうと思うことがよくあります(笑)。僕は、イメージの中では、彼を理解することがすごくよくできているつもりでいます。でも、僕と彼とはすごく離れているようなフィーリングがあります。僕は、彼のように建物に取り組むには、どうしたらいいのだらうかと時々思うのです。僕はもしかしたらポストモダンのほうにいるんだらうなと思うものだから、そのような状態、つまりイメージに支配されている状態からフィーリングを通してリアリティに向かう状態に移行するには、どうすればいいかということを知りたいわけです。それがこういう、あなたの気持ちを非常にディスターブするような質問になって出てしまったのかもしれないですね。

アレギザンダー ……。

難波 それは単に性格のことを言っているのじゃなくて、建物に対してエネルギーを注ぎ込もうとするフィーリングのことを言っているわけです。

アレギザンダー 難波さんが中塾さんに興味をもたれるのは、一つには、リアリティをもったインパルスがあるということ。それが缶の中に入っている缶詰のインパルスじゃなくて、要するに現実のリアリティをもったうえでの衝撃みたいなものを持っているところが、難波さんが一番魅力的に感ずるところじゃないでしょうか。

難波 ですから、イメージに支配された人間が、そうじゃなくなる変化がどういうふうになっているのかというのが、一番興味ある問題なのです。

アレギザンダー それはすごく難しい問題で、話としては長くなってしましますが、個人個人を解放していくという話と全く近い話になってくると思うのです。もしこの建物のもっている良いところだけ挙げていくとしたら、そういう部分は決してイメージに支配された部分ではなくて、本当にリアルな、衝撃に裏づけられたリアリティの世界に基本を置いたもののみが、私にとっては一番良いものであり、それが良いものと見えるのだと思います。

例えば、ポストモダニズムによく似たような部分が出てきてしまうこともあります。その出てきたところは、明らかに間違っていて出来てしまったという感じのところにはかすぎないと思っているわけです。そういうおかしさは幾つかあって、例えば例の体育館の屋根がそうです。水辺に近づく所で壁の所にちょっとしか出ていませんね。あれだけ大きな屋根で、ほとんど庇がないというのは確におかしいと思います。それは全くわれわれの意図から外れたところで、明らかに私たちの間違いで起こったことです。何となくあのやり方自体は、わずかですが、ポストモダニズムのやり方に近いような気がするところがあるかもしれません。でも、あれは完全に間違っていてそうなのではないのです。

ほかの体育館のきれいな所、たとえば黒い外壁とか、構造とか、あるいは内装とか、窓の位置、窓から池が見える時の位置、あとは観客席の部分なんかもそうですね。それは完璧に建物のもたなきやいけ

いか」という反論が成り立つが、その反論は詭弁である。そのように言ったところで、何も明らかにはならない。ただ自分の無力、無責任を表明することになるだけである。この意味で、彼は「単一価値」の立場を取っている。

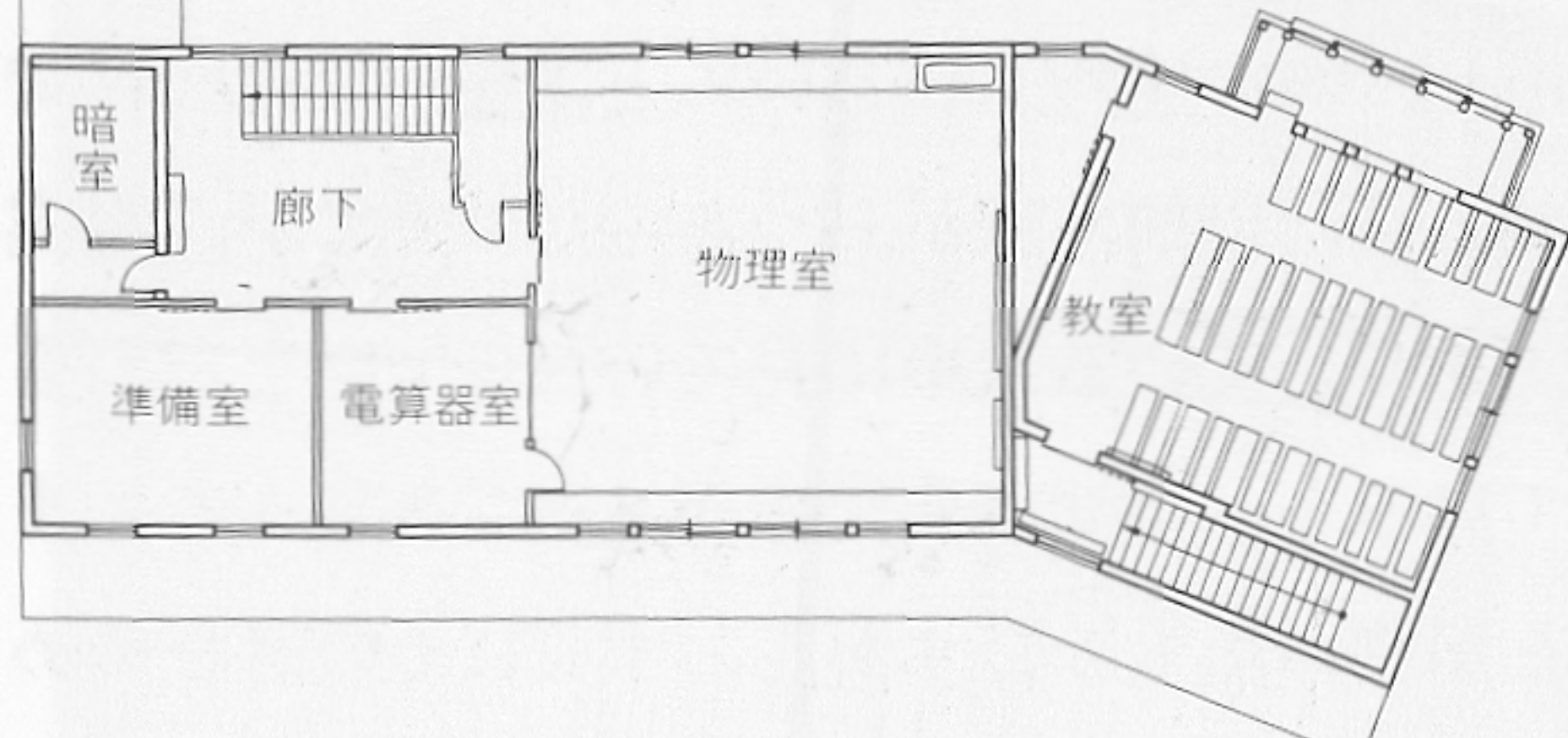
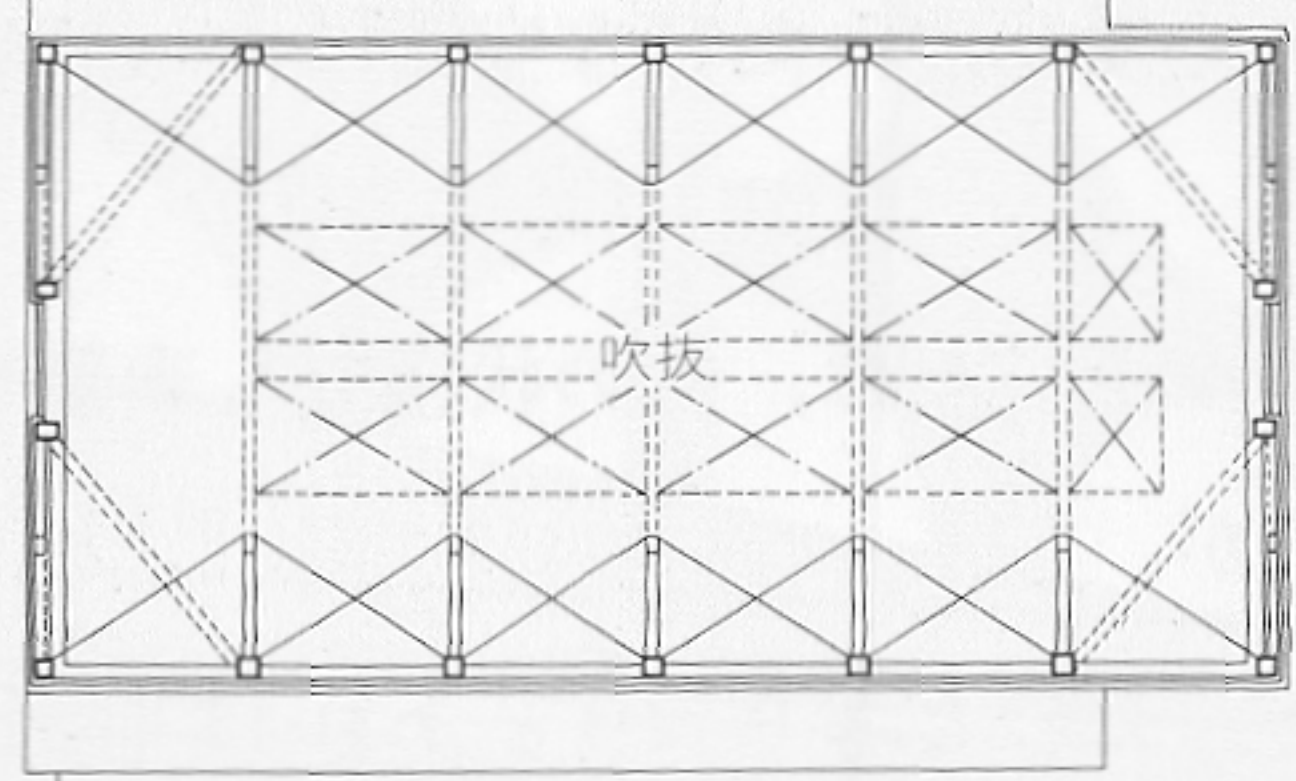
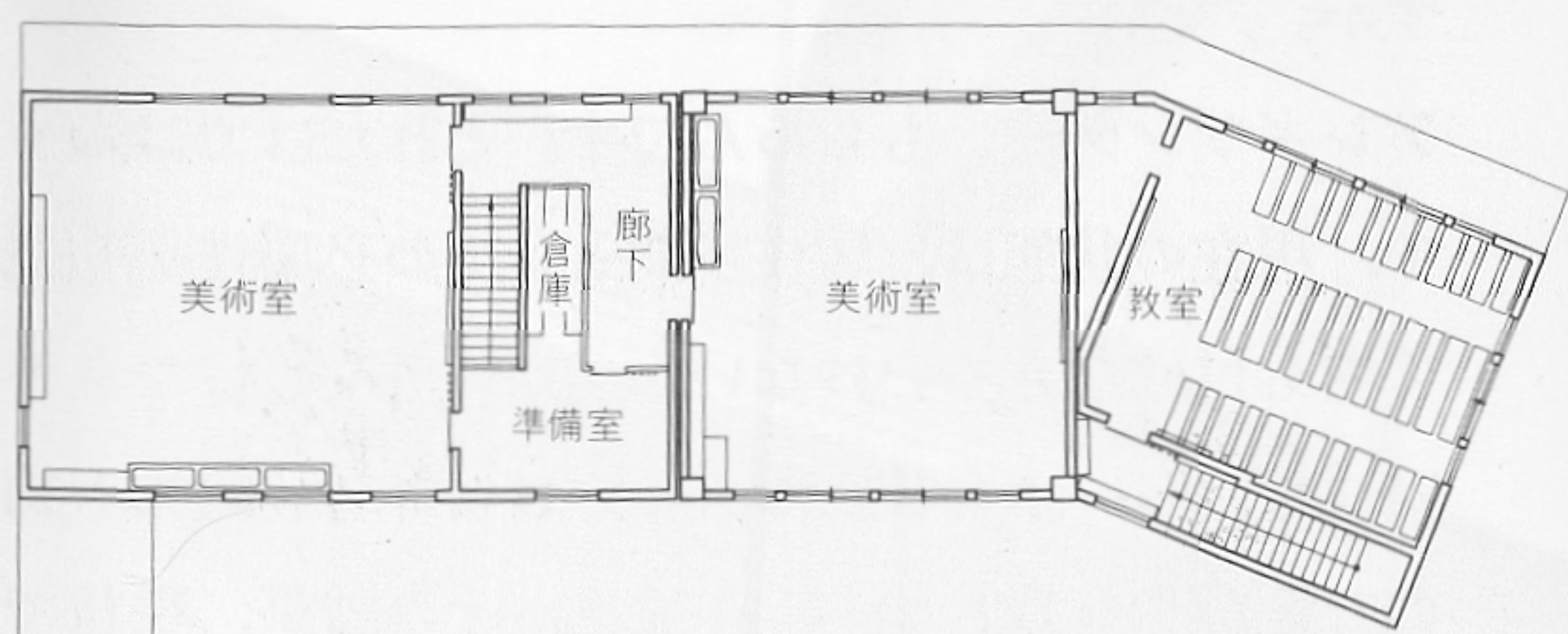
これは、T.クーンの「パラダイム論」とも関係が深い。あるいは、もっと徹底して、P.K.ファイヤアーベント的だと言うべきかもしれない。いずれにしても、異なるパラダイム間には連続性はない。これはことばの定義上ではトートロジーにすぎないが、現実には具体的内容をもつ。つまり、異なるパ

ラダイムは「闘争」によって決着をつけるしかない、ということである。

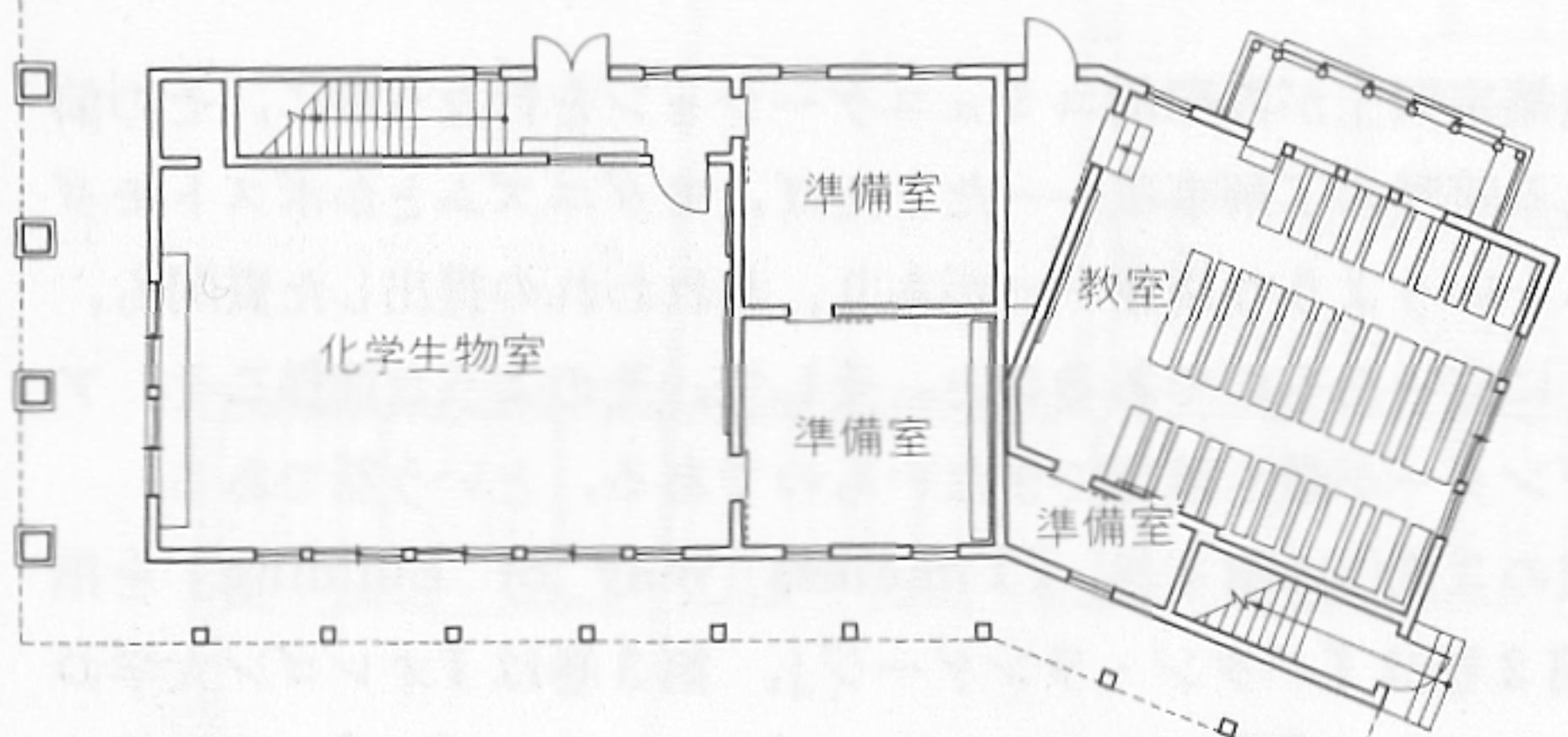
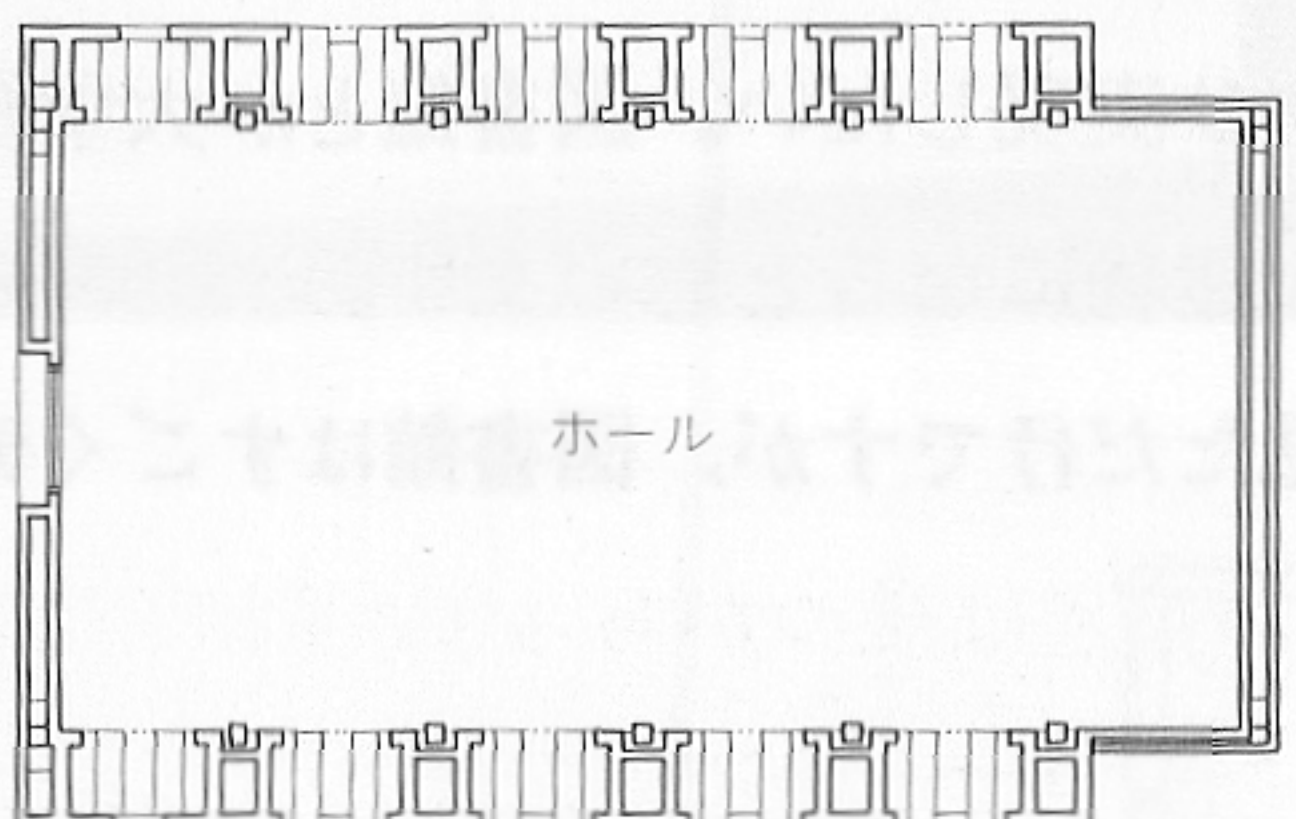
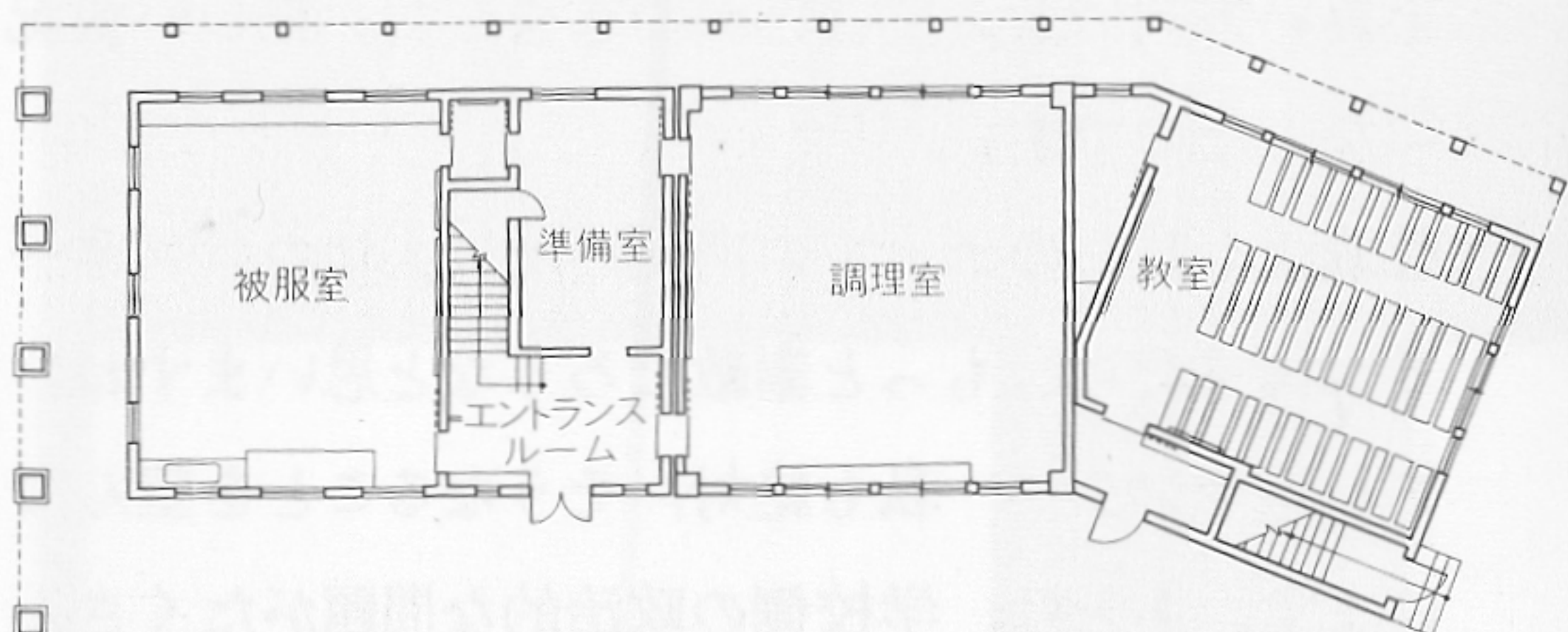
彼の言う“friendly”とは、要するにパラダイムを共有することなのだ。パラダイムは、「事実」によって反証されることはない。パラダイムはおの独自の「事実」をもち、それらは互いに不連続なのだ。しかし、われわれ質問者の前提には、そのような不連続なパラダイム観はなく、連続的な世界観があり、それが当然共有されたものだという暗黙の了解がある。それが、互いに考え方を確かめ合ったわけでもないのに、建築を見るだけで、相手の懐

に入って質問を投げつけても構わないように思わせる、大きな要因となる。つまるところ、われわれはわれわれなりの「事実」を共有しており、それが彼の「事実」と完全にズレていた、ということなのだ。

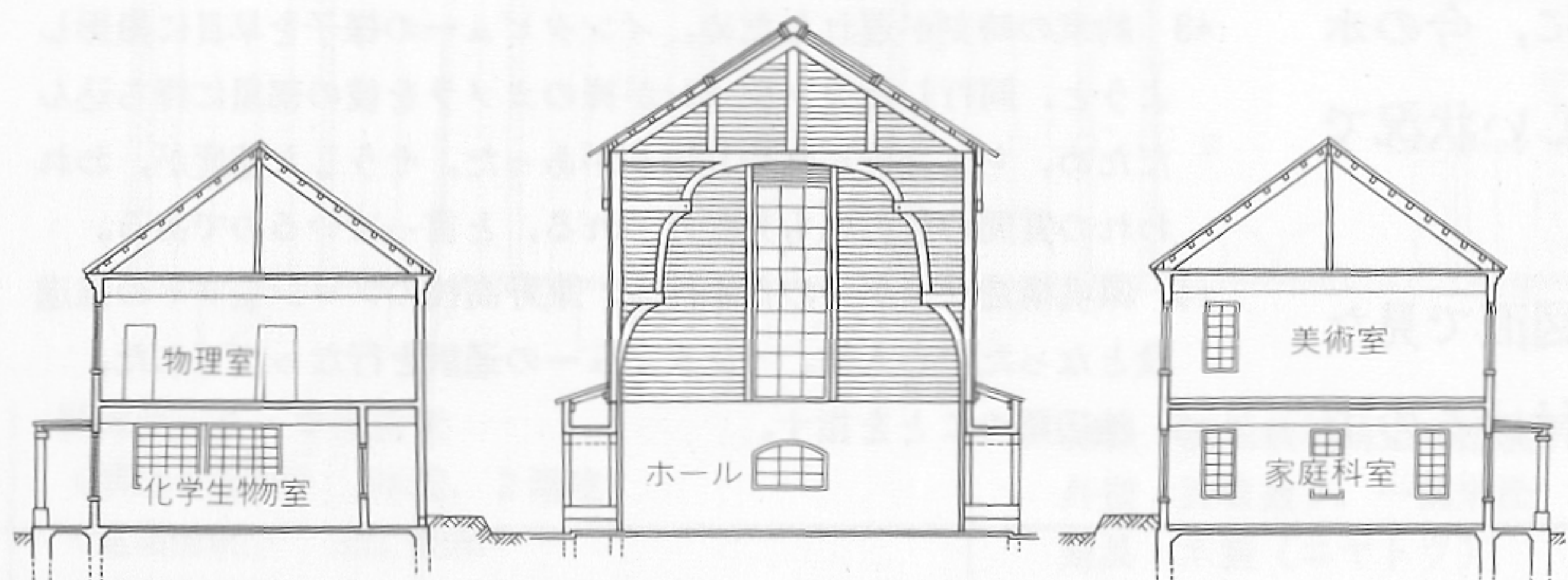
同じような事態は、ピーター・アイゼンマンとのディスカッション(a+u'8409号)でも見られた。アイゼンマンとのズレは「感情(feeling)と思考(thinking)」という対照的な言葉に表わされていたが(これは、ユングによる人間のタイプ分け—感情タイプと思考タイプ—に対応している)、今回のインタビュー



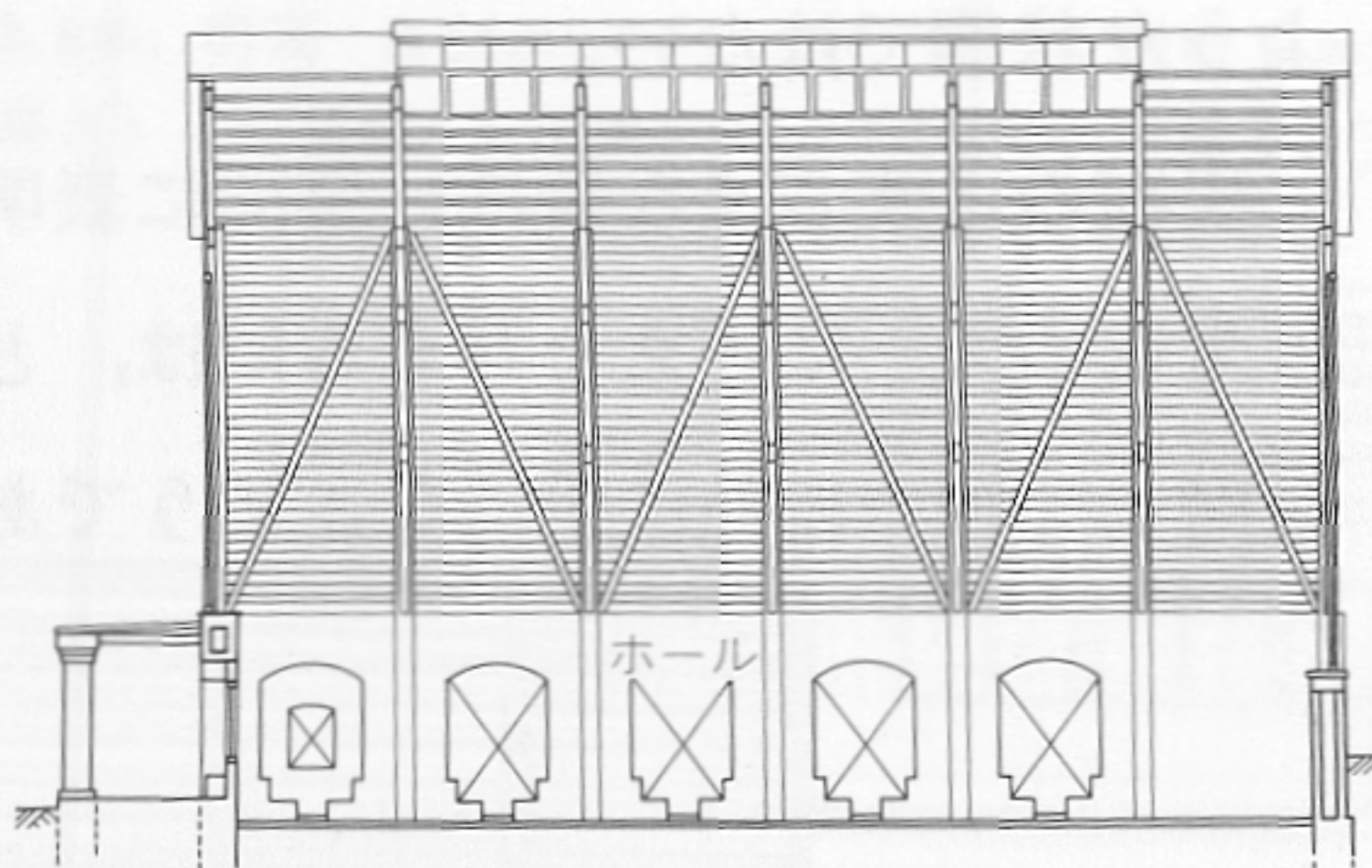
2階平面 2nd



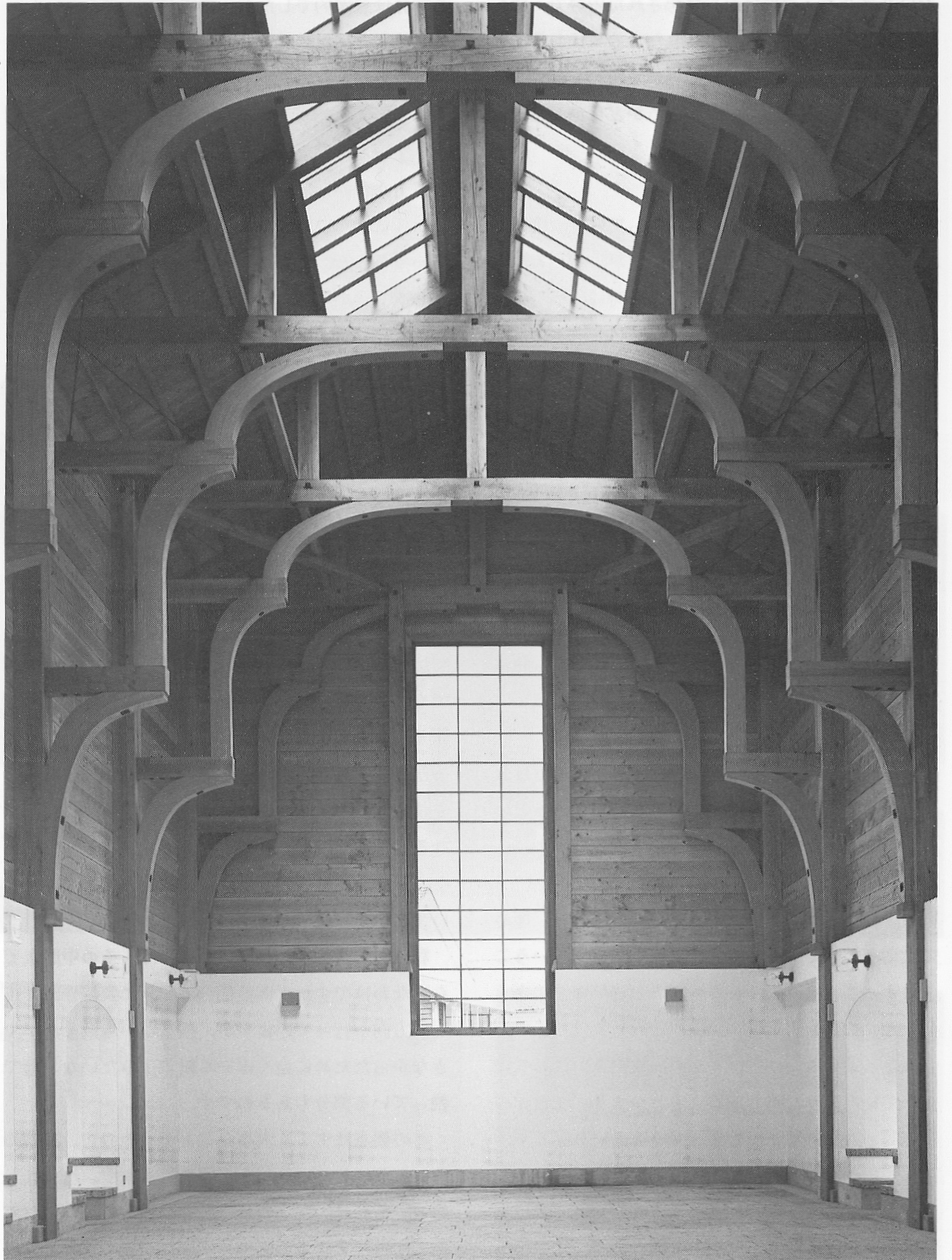
1階平面 1st S=1:500



断面 section S=1:500



断面 section



18 多目的ホール内部

計画データ・多目的ホール

〈構造の種類〉 木造, 腰: 鉄筋コンクリート造

〈延床面積〉 236.97m²

〈最高高さ〉 12.5m, 軒高: 9.0m

〈外部仕上げ〉

屋根: 亜鉛鉄板平葺き錆止め塗装

外壁: 米松厚50, 腰 漆喰塗り(白)

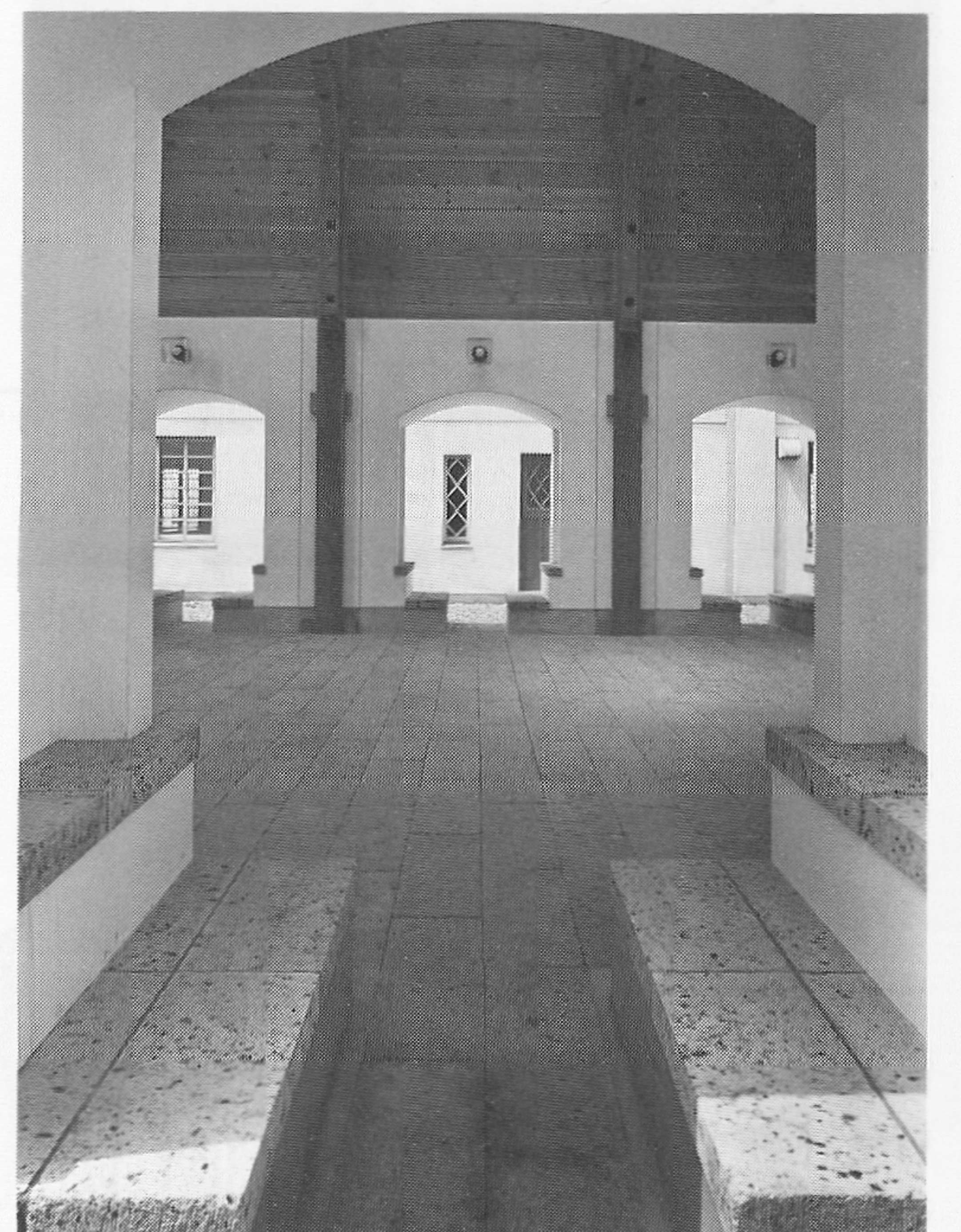
建具: 木製

〈内部仕上げ〉

ホール: 床 大谷石, 壁 米松厚50, 腰 漆喰塗り, 天井 米松厚30表わし

アルコーブ: 床 大谷石, 腰掛け 大谷石, 壁

・天井: 漆喰塗り



19 ホールアルコーブ

ないリアリティの部分から発想された内容で、決してイメージのほうからつくられたものではありません。それは非常に良い所だと思います。

それが本当に判っていただけるかどうか、ちょっと難しいところですが。

難波 それは判りますね。

ところで、今日は雨がすごく降っていて、僕はこれまで何回か東野高校に伺いましたが、初めて傘をさして歩き回りました。建物に入る時に、傘をさしたり閉じたりするのが大変な部分がたくさんあって、これは非常に機能的な話ですが、そのような機能的な面をもう少し考えられたらよかったのじゃないかと感じました。

アレギザンダー 実は、そこは深く考えたところなんです。私としては、人間の存在の仕方とか感情的なもち方としては、雨が降った時は濡れたほうが良いというふうに感じているわけです(笑)。

難波 そうかもしれません。僕の先生*5も、同じようなことを言っていました(笑)。雨が漏っても豚は建物を直せないが、人間はそれを直せる、とね。

中埜 どういう意味？

難波 だから、濡れるのが嫌な人もいるだろうけれども、でも人間ならば気持ちのもち方で変わるといふことです。

アレギザンダー 最後に言っておきたいのは、極めて大切なことで、この建物はまだ未完成だということです。これはポストモダニズムの建築などによく見られることですが、現段階では東野高校の建物を全体として見ると、一つ一つの建物が互いに切り離されているような感じがします。つまり、まだ非常に空間として遊離してしまっているという感じがするところがある。

なぜかと言うと、これはわれわれのプロセスがまだ終わっていないからです。その点について、われわれはずっとフジタ工業と闘いを続けているわけです。もちろんフジタ側には、工期の問題がありました。ですから、そんな状況から生まれたフジタの内部事情もあって、われわれに対して決して注意を向けない、つまり尊敬の念を払わないでやっていこうという態度もあったわけです。もちろん、それはあ

る部分は意図的でしたが、事実がよく判らないという事情もあったのでしょう。

そういう意味で、現在でも100~150の重大な要点について、仕事が終わっていない箇所があるので。ずいぶん前から具体的な指示や仕様を出しているにもかかわらず、です。また、基本的にわれわれの指示に従わなければならないという法的な取り決めがあることも、納得してもらったはずなのですが。

あまり細かく話してもお判りにならないと思いますが、とにかく一番大事なことは、さらに2カ月か3カ月この仕事を続けないと建物は完成しないということです。つまり、まだ工事中なのです。

建築家の誤解の多くがどこから生まれてくるかというと、建築家の考え方の中にあるんだと思いますが、ただイメージがあって、そのイメージを実際来实现するということだけに気を使っていて、つくり上げてゆくプロセスのほうにはいっさい気を使わないというところがあると思います。われわれにとっては、どんな場合でも、つくる最中に、ごくわずかでもある正しい方向からズレているものは、できる限りその時点で正しい方向へ変えていくという施工方法を取っています。そのことに成功すれば、もっと快適で、もっと複雑なものをつくり出すことができるわけです。もし、それをちょっとでも守らないと、ボール紙細工のように見える建築になってしまいます。

私たちの今までの状況というのは、その中間点ぐらいなわけですね。ある部分は非常に調整されて正しい方向へ行っていますが、残念ながら、それができなかったために全くボール紙細工みみたいな状態で残っている部分もあるのです。

この要点はすごく大事なことで、その辺、誤解のないようにしていただきたいと思います。

難波 それは、現場の事務所で模型を見せていただいて、特に大講堂の室内の空間については、そう思いました。

アレギザンダー そのとおりです。それに、今のホームルーム通りの外部空間も、全くおかしい状況です。

難波 ホームルーム棟の横の中庭には、図面で見たとような囲いが付いていませんが、あれは付けるので

すか。

アレギザンダー もちろんです。それだけではなくて、現在の状態は、居住空間としての必要性から見て塀も付けなきゃいけないし、ベンチも付けなきゃいけないし、木も植えなきゃいけないし、実に沢山のことがやり残されています。その結果、現状では、あそこは全く荒地みたいな空間になっています。

難波 セントラルホールは、今の状態でも素敵な空間だと思いますが。

アレギザンダー そのとおりです。あれはほとんど、もう完成しているのです。

しかし、あの建物もいろいろと調整した結果です。例えば、以前は窓が三つあったのですが、現実的に施工をやっている最中に見ていたら、窓を三つも付けていると、空間に非常にダメージを与えてしまうことが判ったものですから、すぐにその窓をやめちゃったわけです。そのことでずいぶん、内部空間を良い方向に変えることができました。正しい状況になったのです。

難波 もしこのホールの南側の所に大学のコロネードが出来たら、もっと素敵だろうと思いますね。

アレギザンダー 私も絶対、そうなることを望んでいます。あとは、学校側の政治的な問題がたくさんありますが、ぜひ実現したい。図書館とか大学棟はととてもきれいな建物になると思います。

難波 図面を見ただけですが、図書館はすごく素敵な建物ですね。

注

*1 建築家同士が国際的コミュニケーションを行なう時に、その前提となる暗黙の了解事項——たとえば、モダニズムとかポストモダニズムというような用語——があり、われわれの提出した質問も、その上に立ったものであること。そして、そのような前提こそ、アレギザンダーが最も承認できないものである、という話である。

*2 彼の3部作の第4巻、『Timeless Way of Building』を指す。第2巻は『パタン・ランゲージ』、第3巻は『オレゴン大学の実験』である。『タイムレス』は、パタン・ランゲージの思想的・根拠について書かれている。

*3 約束の時刻が遅れたため、インタビューの様子を早目に撮影しようとして、同行したカメラマンが裸のカメラを彼の部屋に持ち込んだため、ちょっとしたやり取りがあった。そうした態度が、われわれの質問の仕方にも見受けられる、と言っているのである。

*4 環境構造センターの日本代表。東野高校のプロジェクトの推進役となった中心人物。インタビューの通訳を行なってくれた。

*5 池辺陽のことを指す。

一でも“feeling”という言葉は、一つのキーワードになっている。

アレギザンダーとわれわれ質問者とのズレを表わすキーワードは「リアリティ(reality)とイメージ(image)」である。彼にとっては、感情こそがリアリティであり、イメージは思考によって生み出される仮構にすぎない。

もしも、彼が期待したように、われわれが本当に彼に対してfriendlyになりうるとしたら、思考ではなく感情を通して、イメージではなくリアリティを見ることによって質問すべきだったのであろう。

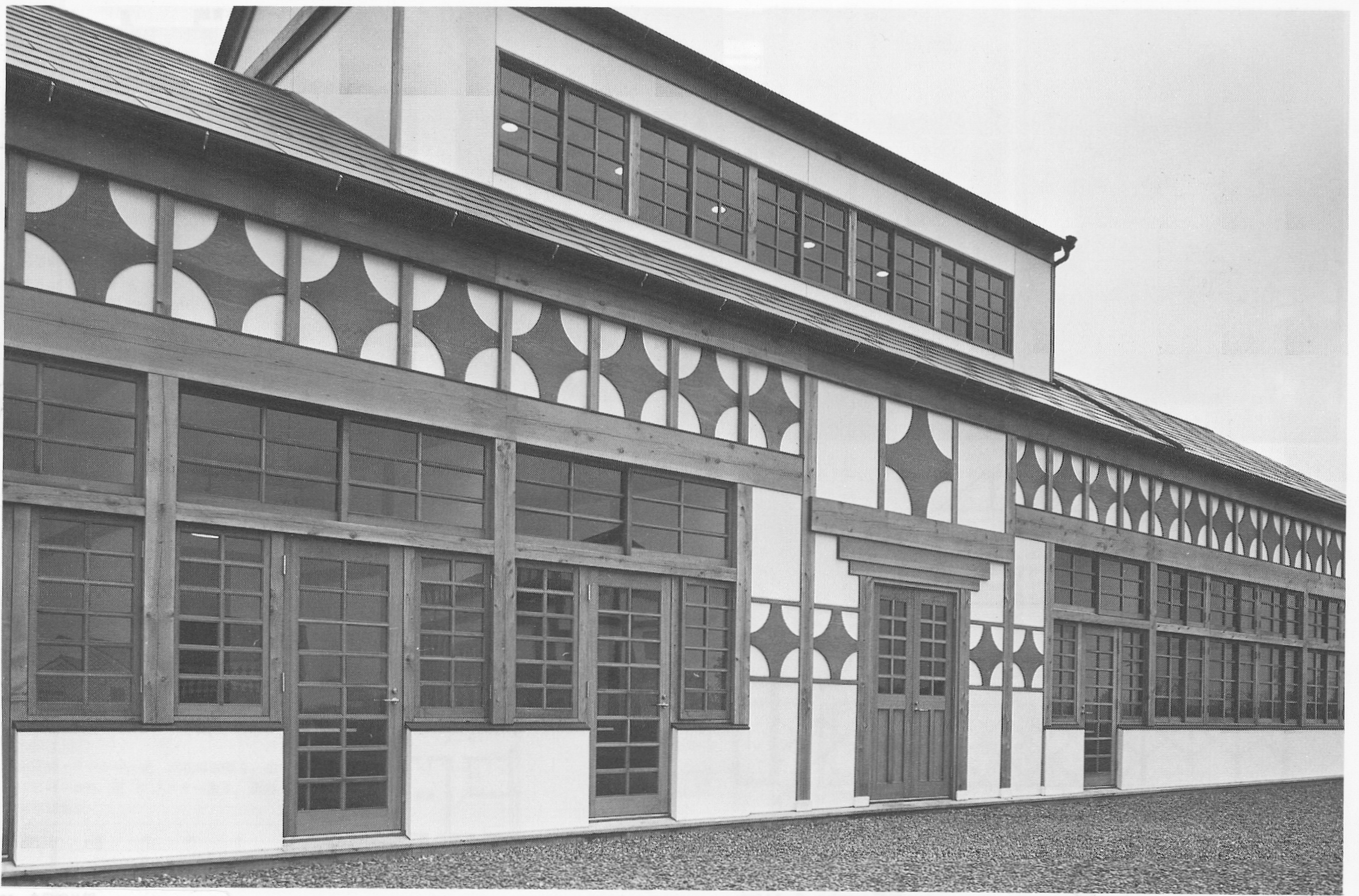
しかし、私としては、インタビューを終えた今となっても、依然として感情と思考との関係に興味があるし、リアリティがイメージに変換される、あるいはその逆のプロセスを知りたいと思う。さらに、もしかしたら、彼のような対立的な問題の立て方こそ仮構にすぎないのではないかと、というひそかな疑いもある。

ともかく、東野高校はまだ完成していない。学生たちが入り、建物にもさらにさまざまな手が加えられ、ある定常状態に達した時、もう一度、今度は感情を通してキャンパスに触れてみることにしよう。

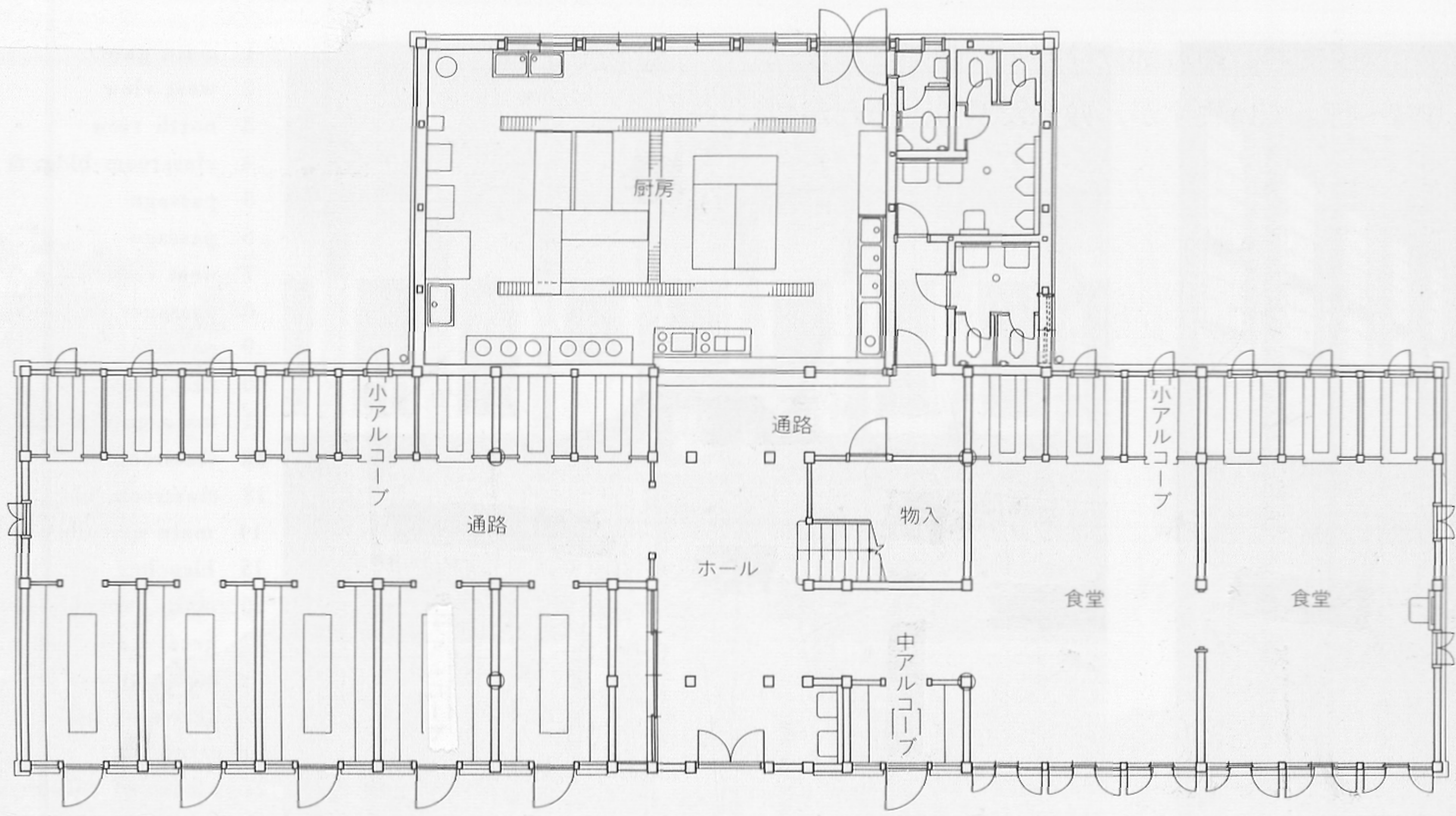
現在の状態は、とても感情だけに頼って評価できるような状態ではない。

現在のさまざまな疑問—質問に表明されているものも含めて—に答えを与えるには、どうしてもその段階まで待つ以外に手はなさそうである。

(難波和彦)



02 学生食堂

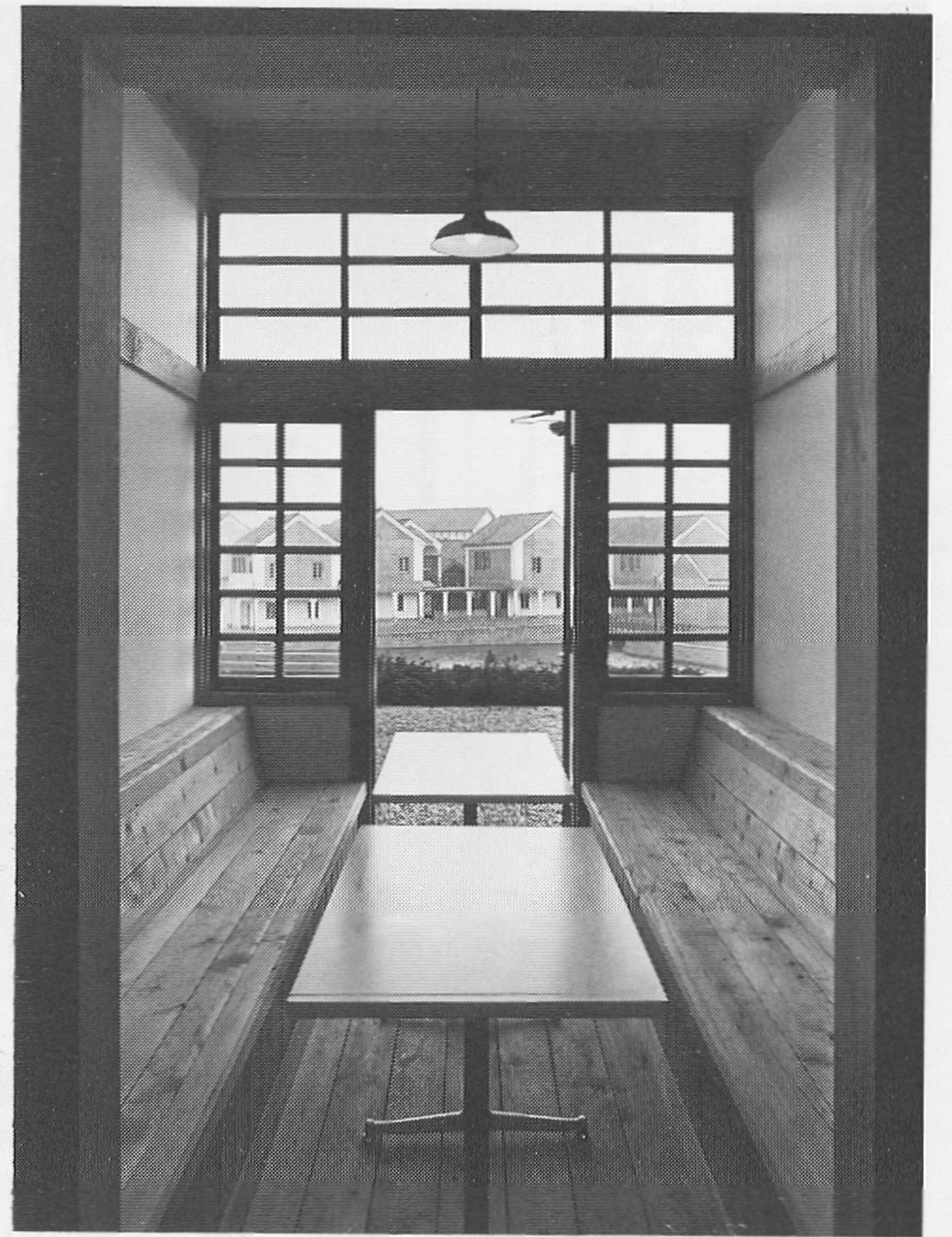


1階平面 1st S=1:500

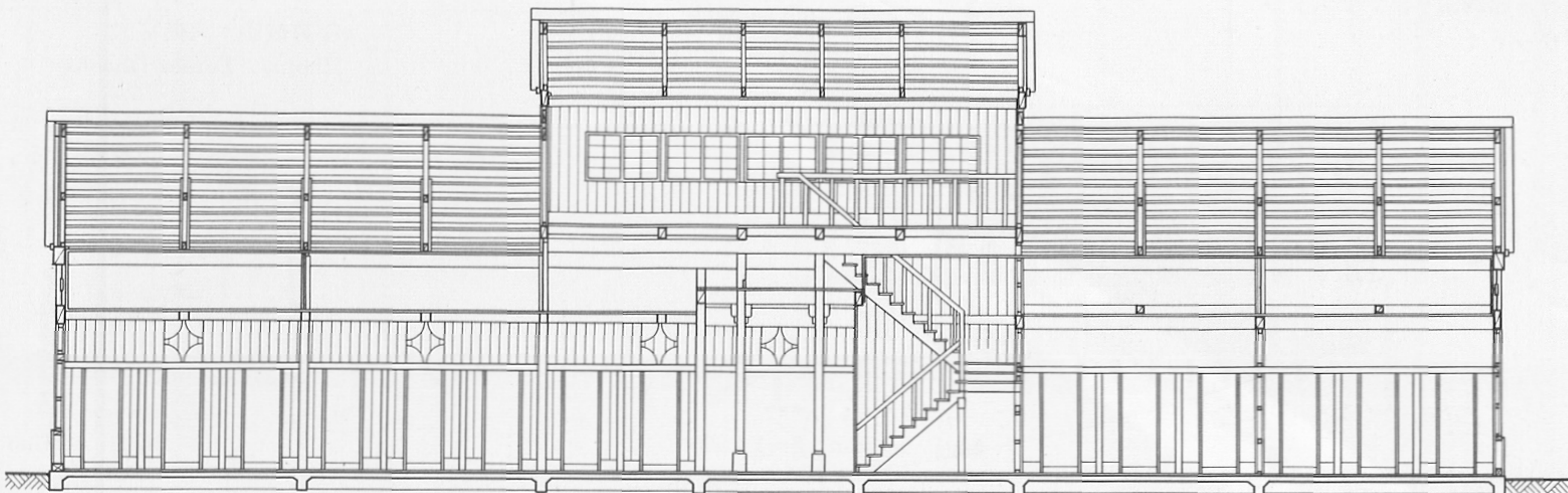
計画データ・学生食堂

- <構造の種類> 木造, 2階建
- <建築面積> 352.85m²
- <延床面積> 401.61m², 1階 352.85m², 2階 48.76m²
- <最高高さ> 9.8m, 軒高: 8.14m
- <階高・天井の高さ> 5.16m, 3.30m
- <外部仕上げ>

- 屋根: 亜鉛鉄板錆止め塗装平葺き
- 外壁: 漆喰塗り, 一部米松
- 建具: 木製 (ニヤトウ)
- <内部仕上げ>
- 食堂・アルコーブ: 床 米桐厚20張り, 巾木・米桐 H=200, 壁 米桐厚20張り一部プラスタ一塗り, 天井 米桐厚15張り



21 食堂アルコーブ



断面 section S=1:500



断面 section



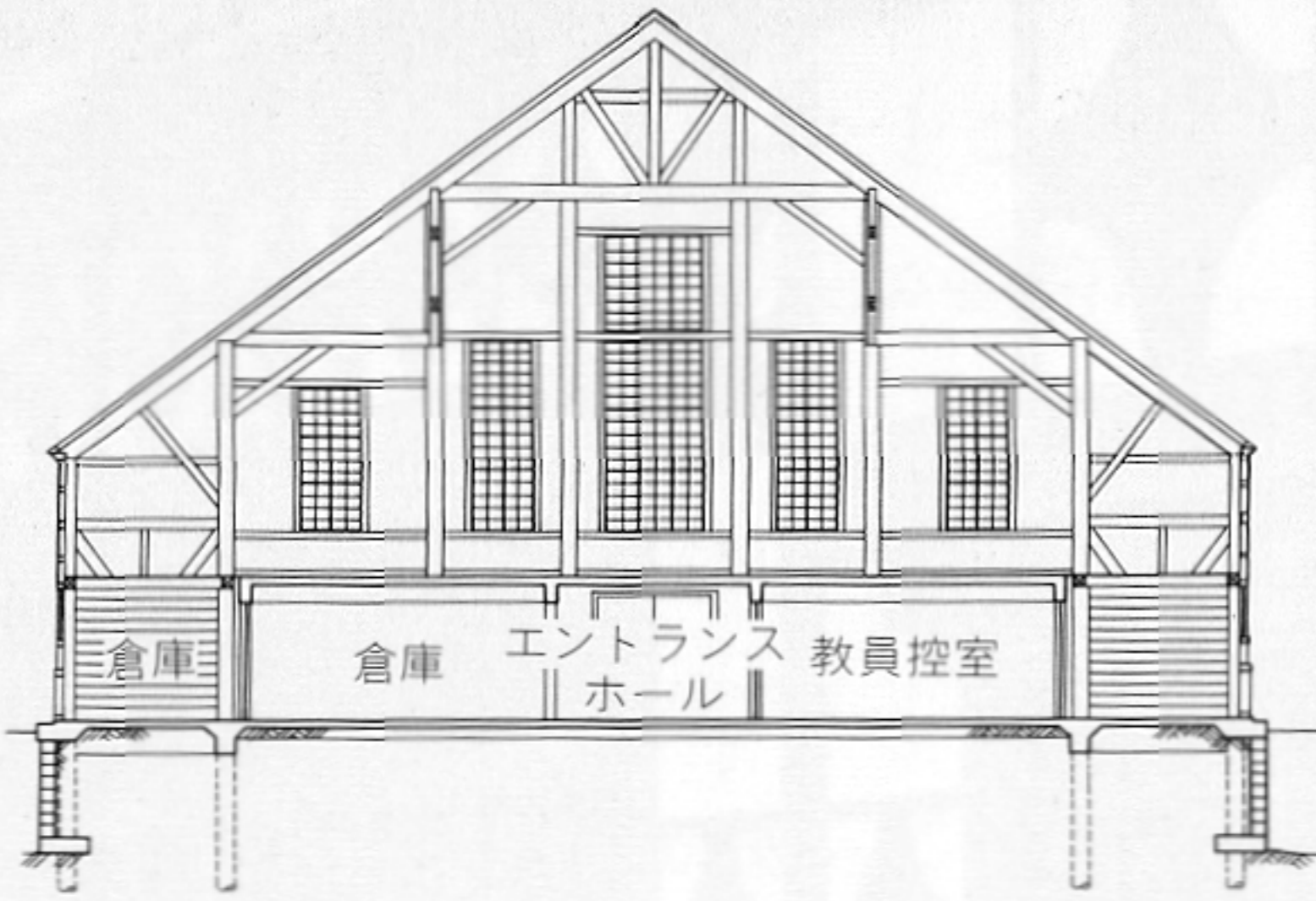
22 体育館内部



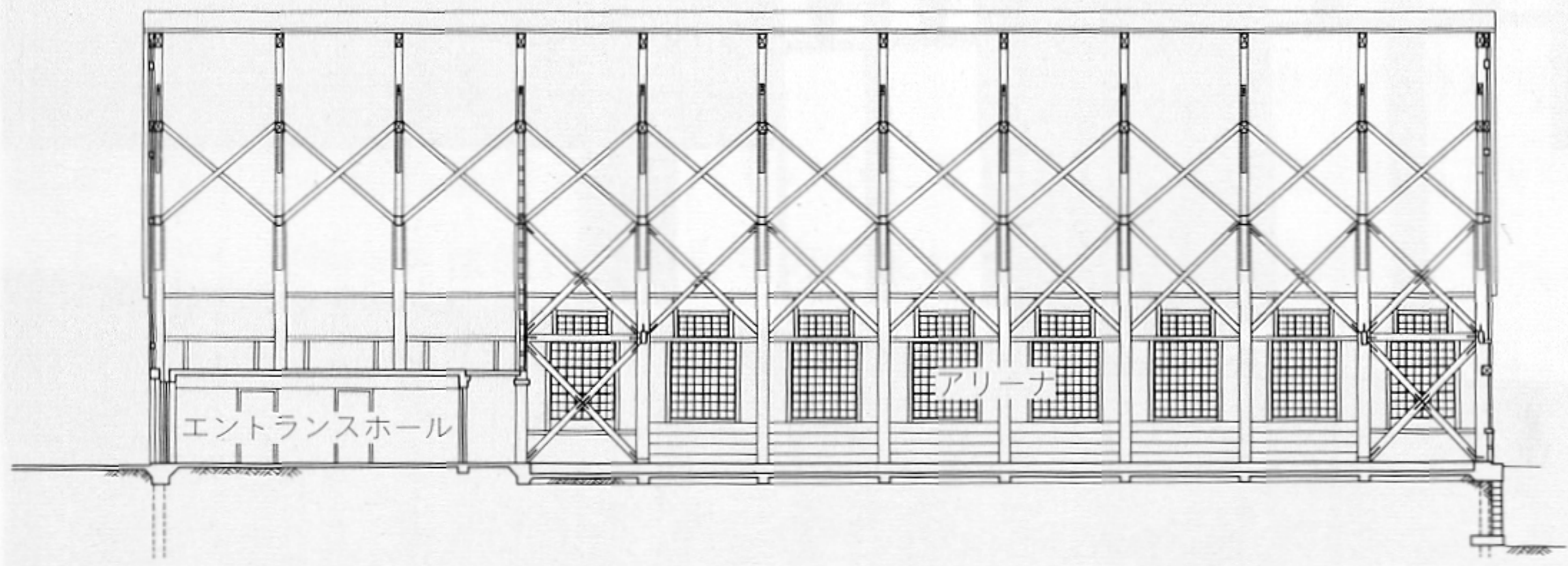
23 体育館内部

計画データ・体育館

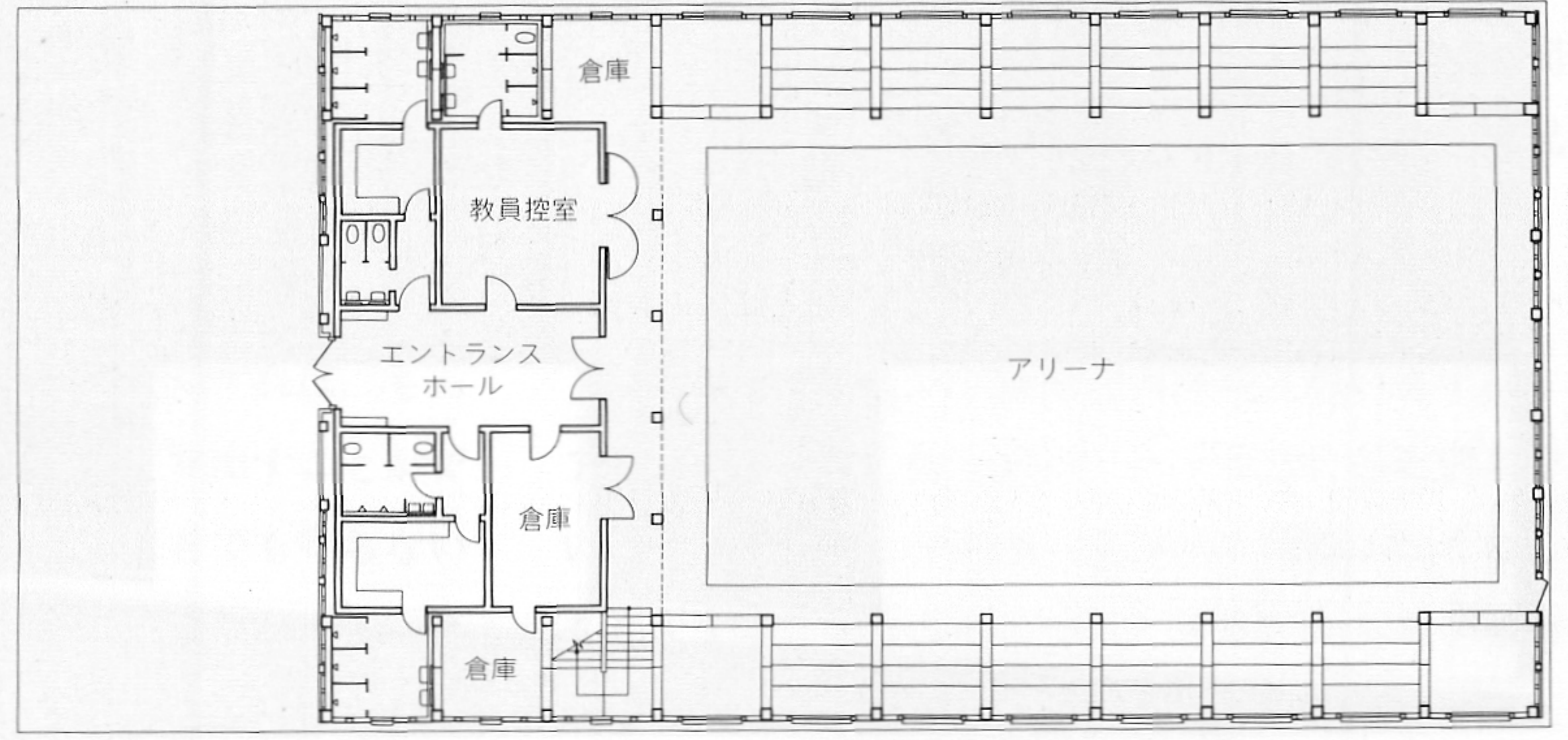
〈構造の種類〉 木造, 一部鉄筋コンクリート造
 〈建築面積〉 672.75m²
 〈延床面積〉 1,134.11m², 1階: 889.04m², 2階: 245.57m²
 〈最高高さ〉 12.9m, 軒高: 4.45m
 〈階高・天井高〉 2.75m, 2.55m
 〈外部仕上げ〉
 屋根: 亜鉛鉄板平葺き錆止め塗装
 外壁: 漆喰塗り(黒)
 建具: 木製(ニヤトウ), 一部スチールOP
 〈内部仕上げ〉
 アリーナ: 床 ユニットフロア, 巾木・米松H=200, 壁 米松厚15張り一部コンクリート打放しAEP塗り, 天井 野地板厚60表わし



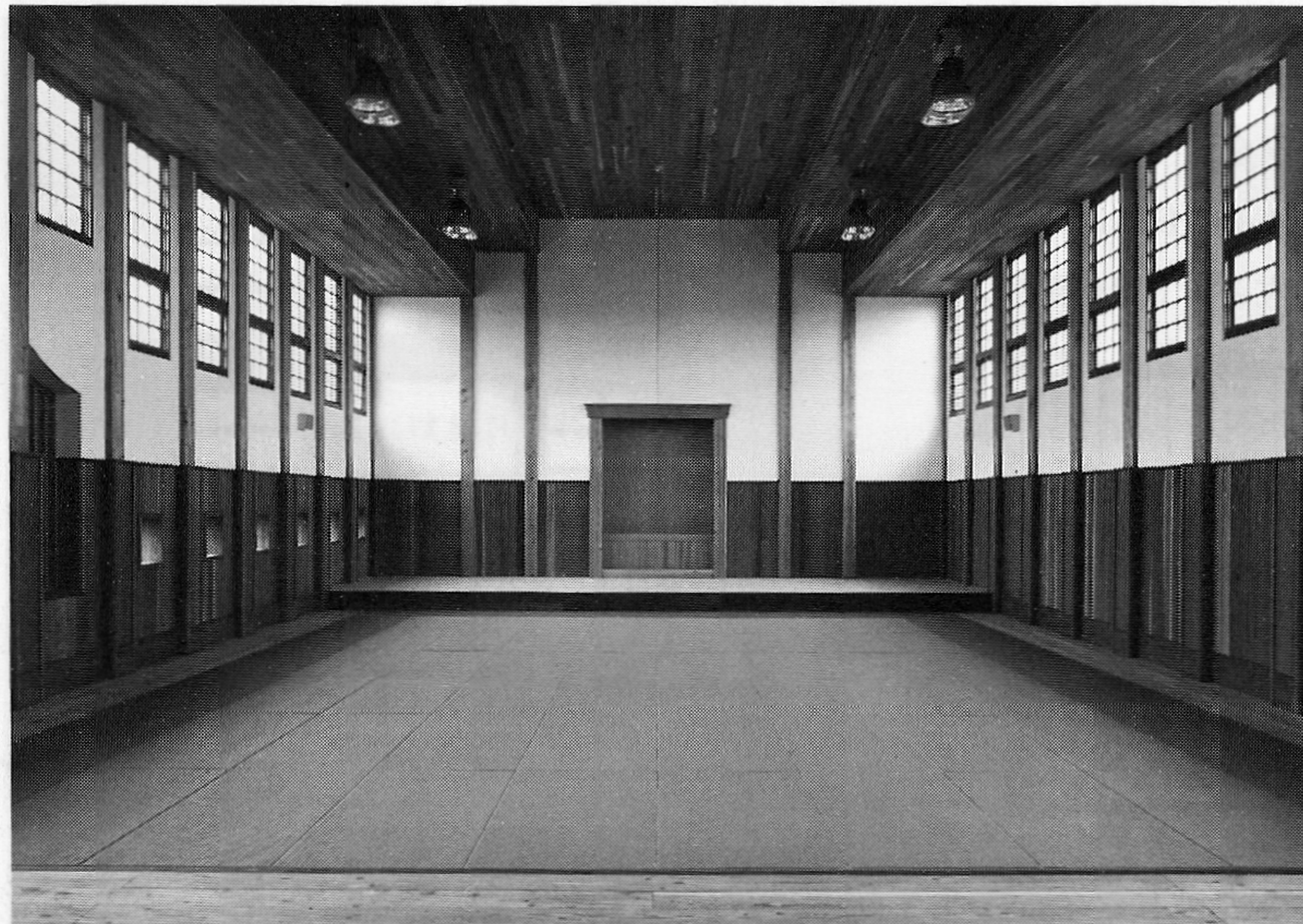
断面 section



断面 section S=1:500



1階平面 1st S=1:500

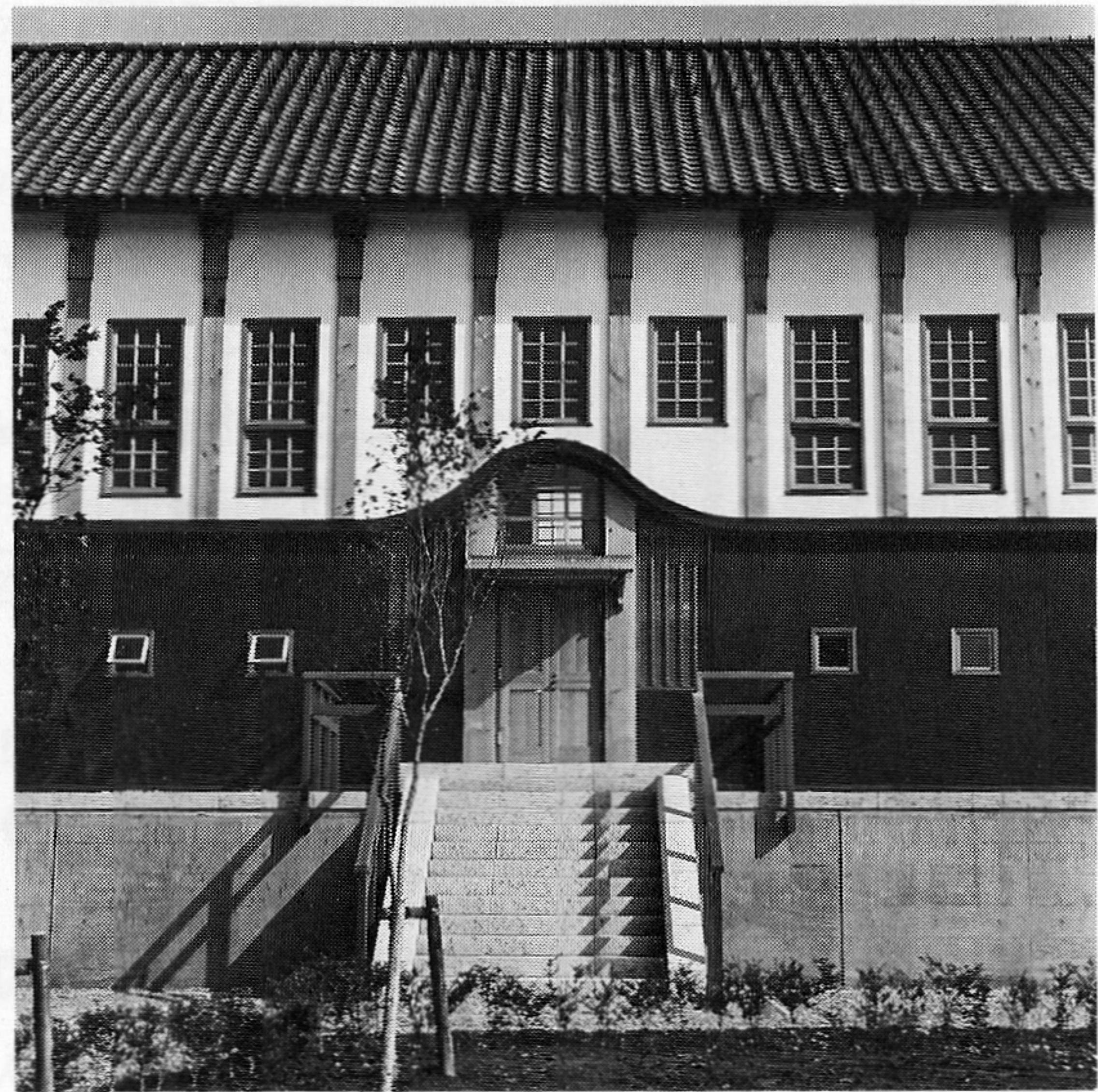


24 武道館内部

計画データ・武道館

〈構造の種類〉 木造
 〈建築面積〉 233.55m²
 〈延床面積〉 233.55m²
 〈最高高さ〉 10.85m, 軒高: 7.15m
 〈天井高〉 5.235m
 〈外部仕上げ〉

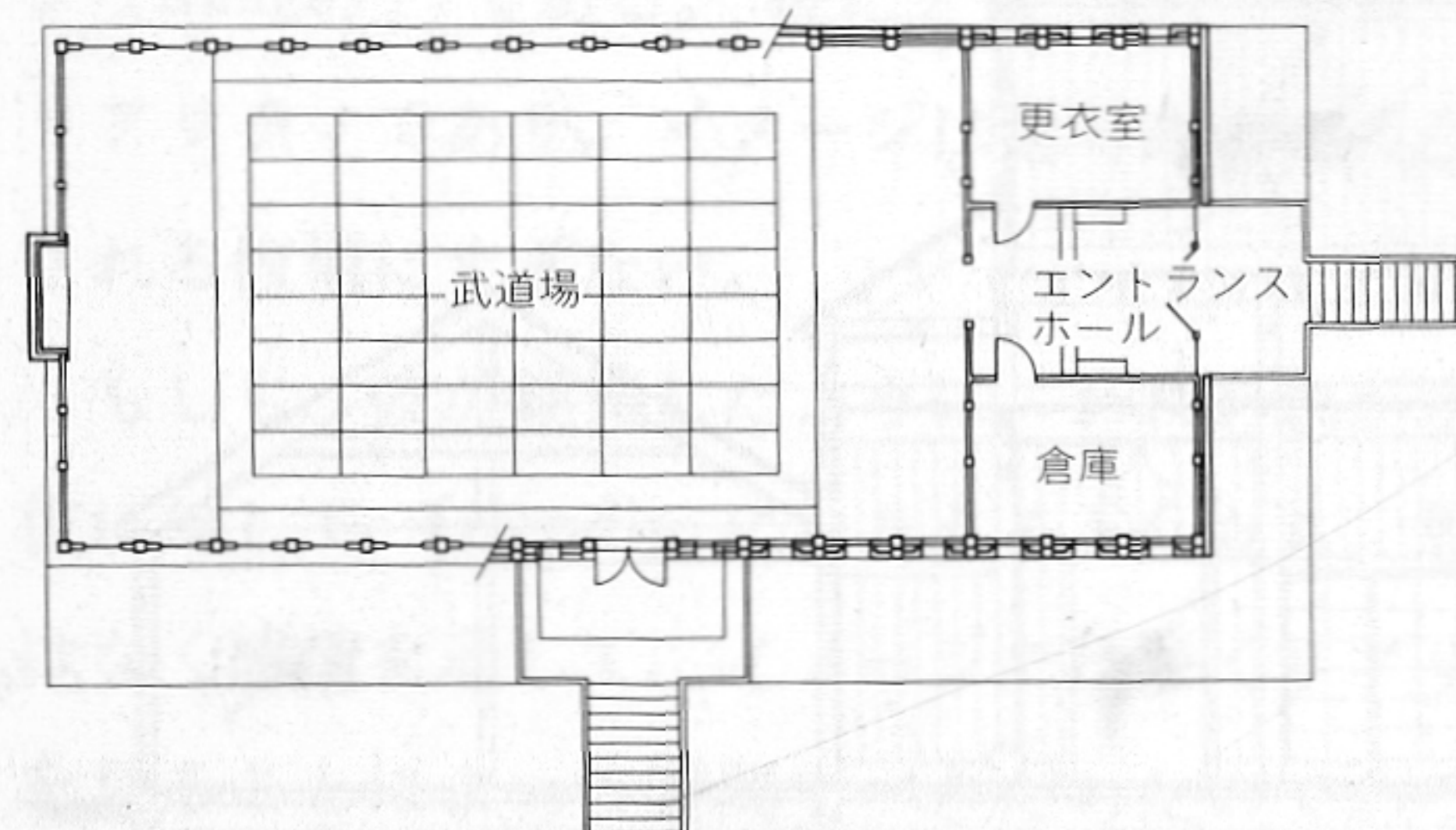
屋根: 瓦葺き
 外壁: 漆喰塗り(黒, 白)
 建具: 木製(ニヤトウ)
 〈内部仕上げ〉
 武道場: 床 スタイロ壁一部米松厚40張り, 桧張り, 壁 レッドウッド厚20張り, プラスター塗り, 天井 レッドウッド



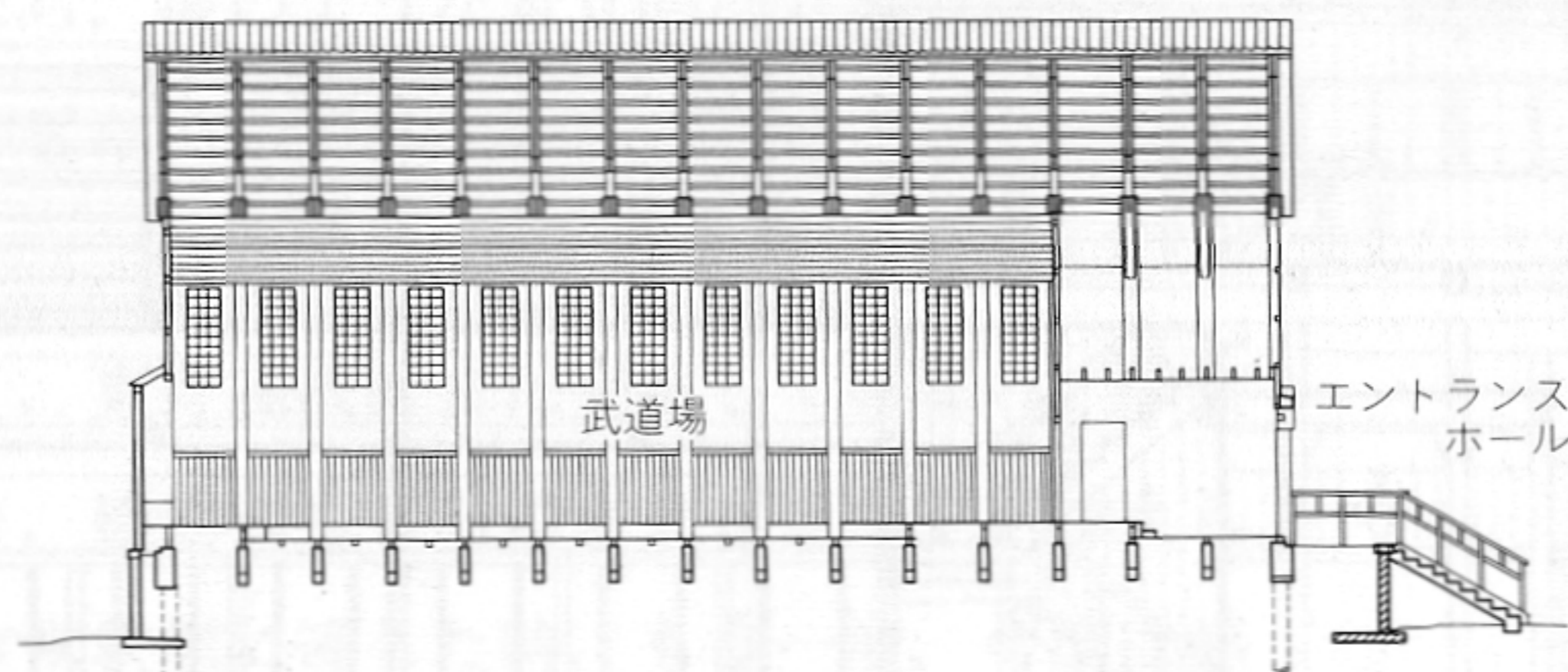
25 武道館入口

- 1 main gate
- 2 west view
- 3 north view
- 4 classroom bldg. & hall
- 5 passage
- 6 passage
- 7 west view
- 8 passage
- 9 passage
- 10 first gate
- 11 main gate & first gate
- 12 classroom
- 13 classroom bldg.
- 14 main assembly space
- 15 bleacher
- 16 main assembly space
- 17 great hall
- 18 multipurpose hall
- 19 alcove of hall
- 20 cafeteria
- 21 alcove of cafeteria
- 22 arena
- 23 arena
- 24 budoh arena
- 25 budoh bldg.
- 26 lounge for teacher
- 27 lounge for teacher
- 28 arcade
- 29 fence

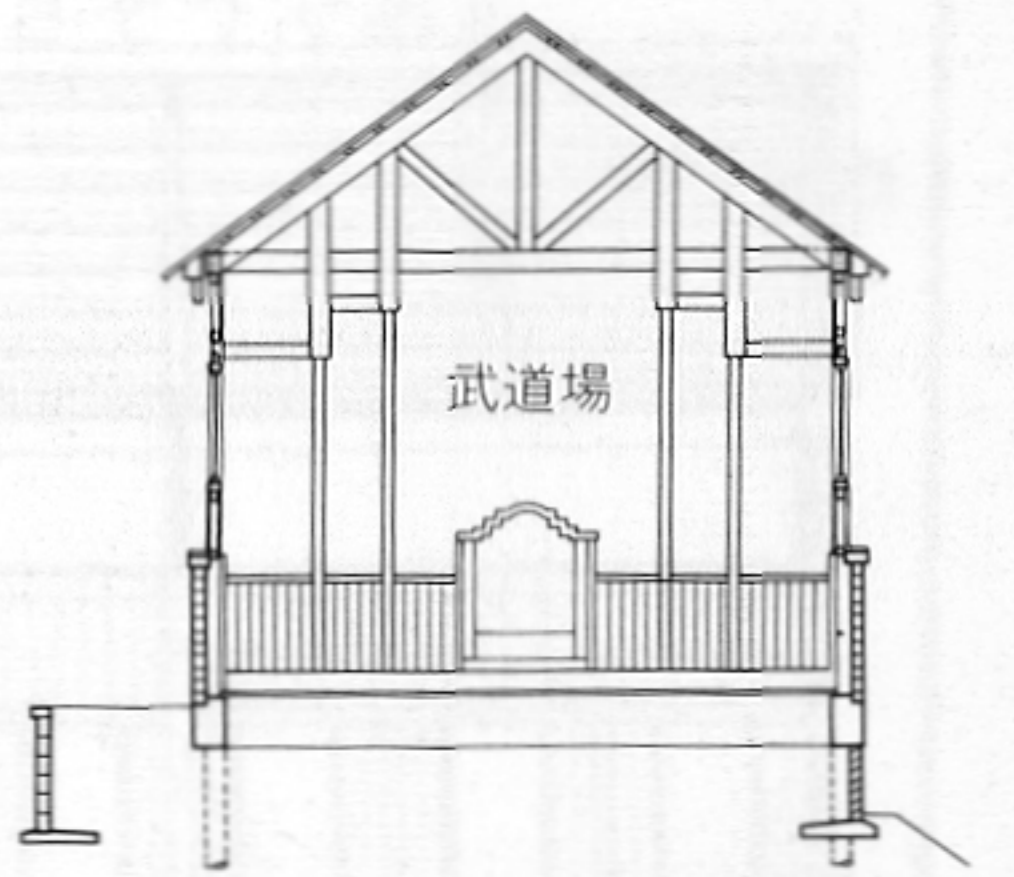
写真撮影: 大橋富夫
 Photos: Tomio Ohashi



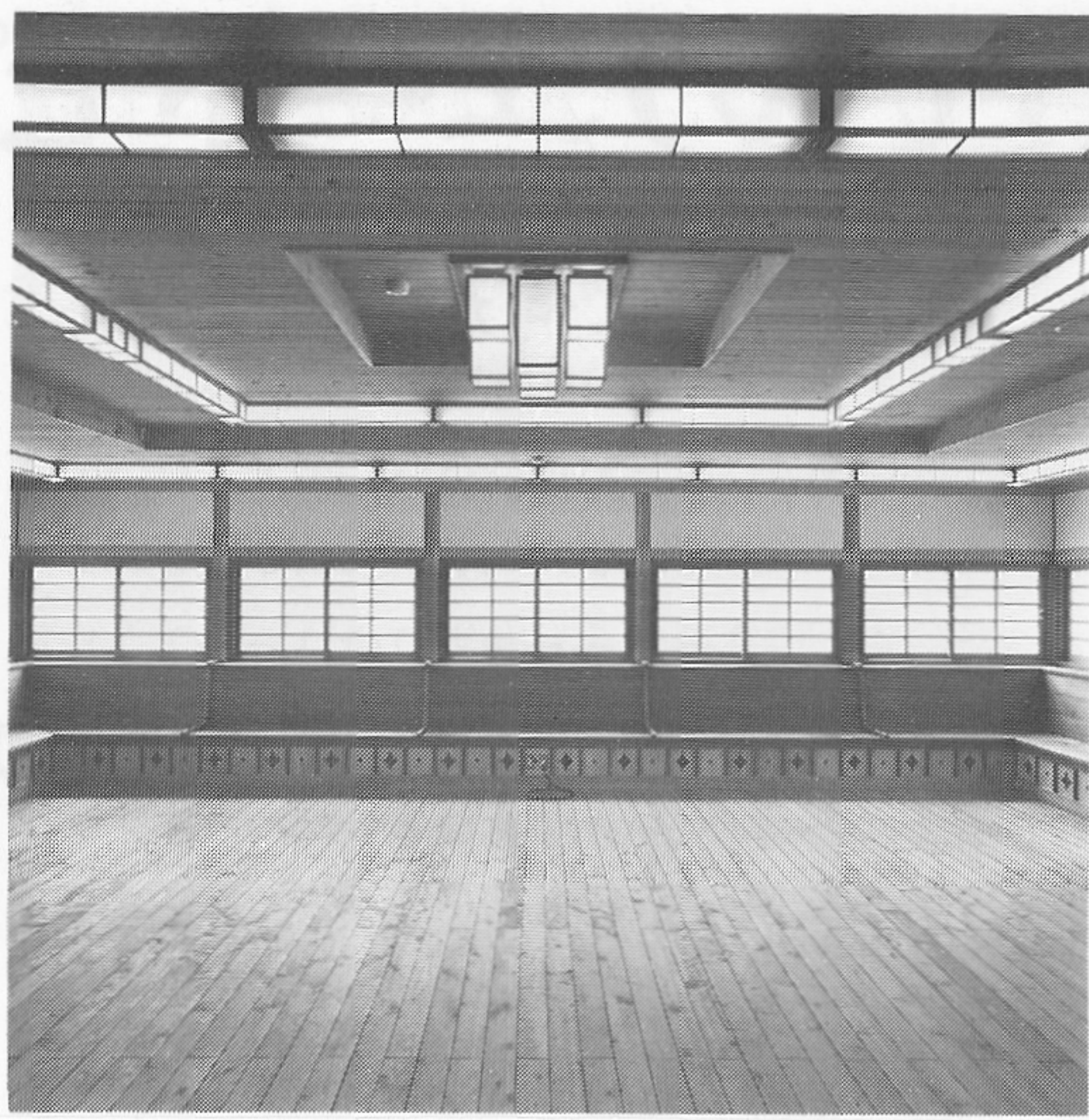
1階平面 1st S=1:500



断面 section S=1:500



断面 section



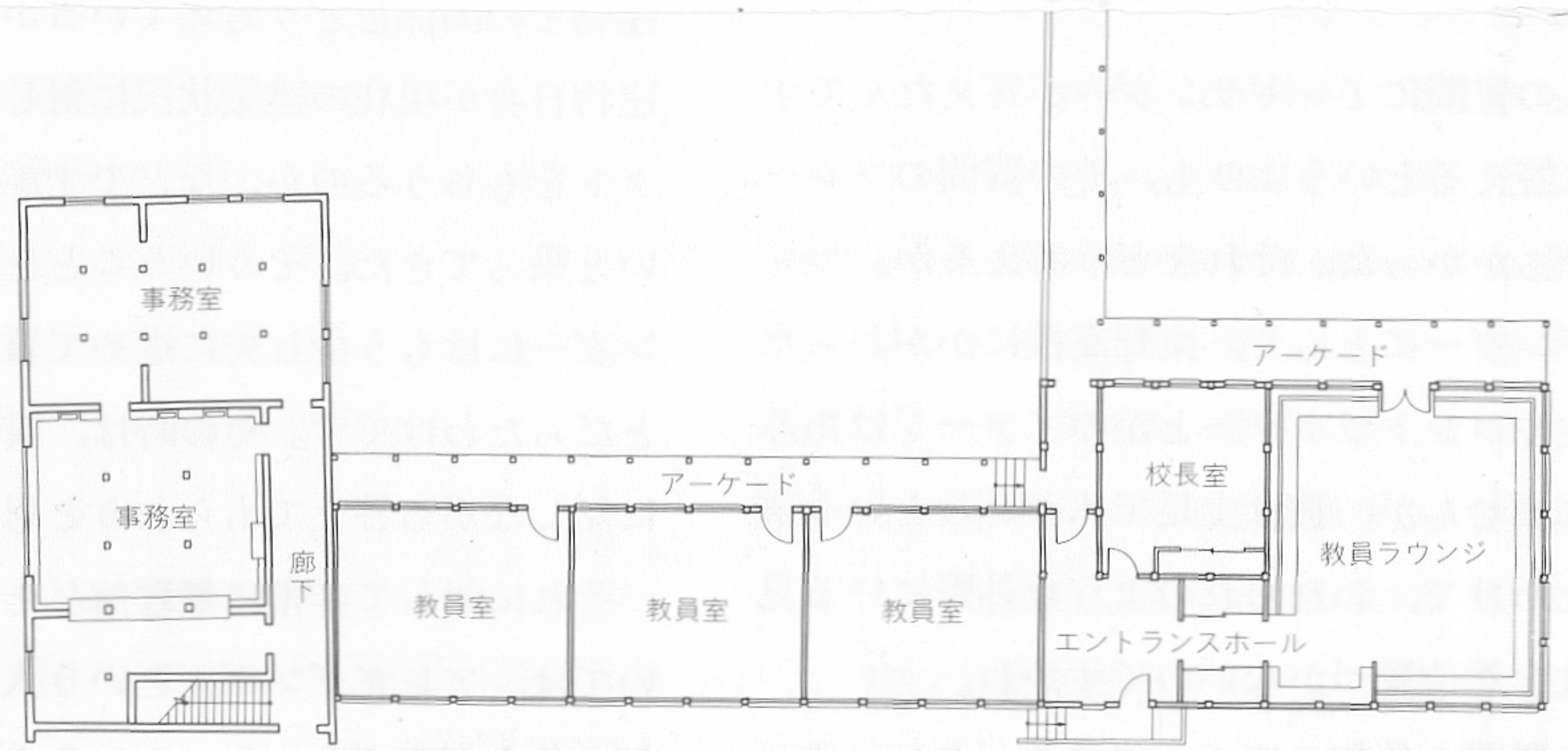
26 教員ラウンジベンチ

27 教員ラウンジ

28 教員ラウンジ前アーケード

計画データ・教員棟

- 〈構造の種類〉 木造
- 〈建築面積〉 384.53m²
- 〈延床面積〉 383.73m²
- 〈最高高さ〉 7.5m, 軒高: 3.8m
- 〈天井高〉 2.7m
- 〈外部仕上げ〉
- 屋根: 瓦葺き, 一部亜鉛鉄板錆止め塗装
- 外壁: レッドウッド張り一部モルタル金鍍
- 建具: 木製
- 外階段: 床 モルタル金鍍
- アーケード: 床 米松厚20
- 〈内部仕上げ〉
- 教員室・ラウンジ: 床 米松厚20張り, 巾木・米松H=200, 壁 プラスター塗り, 天井 米松厚15張り



1階平面 1st S=1:500

29 敷地全体を塀が取り囲む

